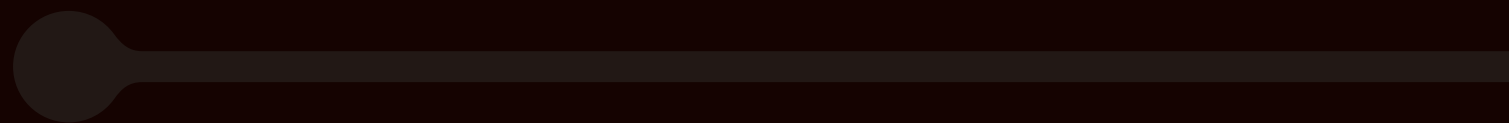


102
17

TERATOTERA
DOCUMENT





TERATOTERA

D O

C U

M E

N T

20

17

CONTENTS

目次

PAGE #

04

目次
CONTENTS

PAGE #

06

TERATOTERA とは
ABOUT TERATOTERA

PAGE #

08

はじめに
PREFACE

PAGE #

10

年間スケジュール
SCHEDULE

PAGE #

54

シンポジウム「西を動かす」
SYMPOSIUM

PAGE #

60

作家プロフィール
ARTISTS' PROFILE

PAGE #

64

来場者アンケート
SUMMARY OF QUESTIONNAIRE

PAGE #

66

テラッコの感想
TERAKKO'S VOICE

PAGE #

12

リアリー・リアリー・フリーマーケット
REALLY REALLY FREE MARKET

PAGE #

22

西荻映像祭
NISHI-OGIKUBO FILM FESTIVAL

PAGE #

32

パフォーマンス・デイ
PERFORMANCE DAY

PAGE #

36

TERATOTERA 祭り
TERATOTERA FESTIVAL

PAGE #

68

アートプロジェクトの0123
INTRODUCTION TO ART PROJECT

PAGE #

70

終わりに
EPILOUGE

PAGE #

72

クレジット
CREDIT

ABOUT TERATOTERA

TERATOTERA とは？

TERATOTERA (テラトテラ) は、東京都とアーツカウンシル東京と、吉祥寺に拠点を置いて現在進行形の芸術をフィーチャーしている一般社団法人 Ongoing が協働して、平成 21 年度より JR 中央線高円寺駅～吉祥寺駅～国分寺駅区間をメインとした東京・杉並及び武蔵野、多摩地域を舞台に展開する、地域密着型アートプロジェクトおよびその発信機関の総称です。TERATOTERA では、音楽ライブ、展覧会などのアートプログラムを、年間を通して実施しています。また、アートの現場で活躍する人材の育成に重きを置き、アートプログラムの運営をボランティアスタッフが主導すると共に、アート関係者に向けた様々なレクチャーを開講しています。



TERATOTERA の活動拠点の1つ、吉祥寺の街並み。

PREFACE

はじめに

JR 中央線の高円寺・吉祥寺・国分寺という“3つの寺”の駅を繋ぐ周辺地域で展開しているアートプロジェクト TERATOTERA（テラトテラ）。2009年よりスタートした本プロジェクトも9年目を迎えました。本年度も地域との連携を図りながら、トーク、レクチャー、パフォーマンス、展覧会、そして今年はフリーマーケットまで、場所や内容を変えながら様々な企画を実施してきました。

今年度は、武蔵境にある武蔵野プレイスと協働して市民参加型のお金を使わないフリーマーケットから始まり、夏は西荻窪の街を舞台とした映像祭、秋は東小金井の高架下でのパフォーマンスイベント、11月には毎年恒例となった三鷹駅周辺地域の複数の会場を使つての大型展覧会、そして12月には、2020年を見据え東京の西側をテーマにしたシンポジウムを開催しました。またこうしたイベントと並行して、アートプロジェクトの基礎を学ぶレクチャーなども実施してきました。

TERATOTERAのすべての企画は、TERAKKO（テラッコ）と呼ばれるボラン

ティアスタッフが中心的な役割を担っているのですが、今年は例年にも増して彼ら、彼女らの活躍が目立ちました。様々な現場で、指示を待たずして自発的に物事を進めていくTERAKKOの活動を見るにつけて頼もしく、なにより皆が笑いながらTERATOTERAの場と空気を作り上げてくれているのがとても嬉しく思えました。本ドキュメントのテキストのほとんどは、そうしたTERAKKOたちの言葉によって構成されており、彼ら彼女らがどのような思いで本活動に関わってきたのが伝わってくる内容となっています。TERAKKOの案内のもと、現在進行形で成長を続けるアートプロジェクト＝TERATOTERAの2017年度の軌跡をじっくりとご覧いただければと思います。

TERATOTERA ディレクター
小川希

TERATOTERA is a community-based art project connecting the areas around three stations named after their local temples (known as tera or ji); Koenji, Kichijoji and Kokubunji on the JR Chuo Line. This year marks the ninth year since our establishment in 2009. In continuation with our activities from previous years, we held many different events in various locations from talks, lectures, performances and exhibitions, with the addition of a flea market (Really Really “Free” Market) this year.

In cooperation with Musashino Place in Musashisakai, TERATOTERA 2017 started with Really Really “Free” Market, a flea market in which anyone could participate and with no exchange of money involved. In summer a film festival took place, using many shops in Nishiogikubo as a stage. In early fall, a performance event was held in Higashikoganei utilizing the space under the overhead railway. In November, we held our annual event, a large-scale city-wide exhibition using multiple venues around Mitaka station. In December, taking the 2020 Olympics into consideration, a symposium was held to discuss the future of the west side of

Tokyo. In parallel with these events, TERATOTERA provided lectures on the basic principles of art project management and operation.

In TERATOTERA, volunteer members called TERAKKO play central roles in the planning and management of events. This year, building on from previous years, the contribution of TERAKKO volunteer staff stood out more than ever. Working across various locations, members did not just wait for instructions but acted out of their own initiatives. TERAKKO are not only reliable but more than anything else I truly value the joy and laughter that they bring to all the projects at TERATOTERA.

The greater part of this document consists of the words of TERAKKO members. It gives you an insight into their thoughts and the ways in which they came to engage themselves in this project. Under the guidance of TERAKKO, I hope you can follow the tracks left by TERATOTERA 2017, an art project which ever keeps moving forward.

TERATOTERA Director
Nozomu Ogawa

SCHEDULE

2017年度 年間スケジュール

INTRODUCTION TO THE ART PROJECT

6.22 - 2018.2.22

アートプロジェクトの0123 (オイッチニーサン)



【開催日時】
2017年6月22日(木)～
2018年2月22日(木)
19:30～21:30 原則隔週木曜日 全17回

【会場】
アーツカウンシル東京 ROOM302

【コーディネーター】
小川希

【ゲスト】
いちむらみさこ、小泉明郎、山本篤、ペビン結構設計、
福住廉、港千尋、窪田研二、
Minatomachi Art Table, Nagoya
(青田真也、野田智子、吉田有里)、
相馬千秋

REALLY REALLY FREE MARKET

7.13 - 7.30

リアリー・リアリー・フリーマーケット



【開催日時】
2017年7月13日(木)～7月30日(日)
9:30～22:00 ※内容により異なる

【会場】
境南ふれあい広場公園
武蔵野プレイス

【参加アーティスト】
Aokid、Post-Museum

NISHI-OGIKUBO FILM FESTIVAL 2017

8.23 - 8.27

西荻映像祭 2017 - 不可分な労働と表現 -



【開催日時】
2017年8月23日(水)～27日(日)
12:00～22:00 ※会場により異なる

【会場】
信愛書店 en=gawa、旅の本屋のまど、HATOB A、
ハンサム食堂、ピリヤード山崎、
フジクリーニング、高架下空き店舗

【参加アーティスト】
伊阪柁、奥田栄希、田中良佑、土屋萌児、
橋本匠、林千歩、東野哲史

PERFORMANCE DAY

10.15

パフォーマンス・デイ - 秋のカラダ収穫祭 -



【開催日時】
2017年10月15日(日)
15:00～ / 16:30～

【会場】
コミュニティステーション東小金井

【参加アーティスト】
FAIFAI - 快快 -、
KPR / 開幕ペナントレース

TERATOTERA FESTIVAL 2017

11.10 - 11.12

TERATOTERA 祭り 2017
Neo-political ～わたしたちのまつりごと～



【開催日時】
2017年11月10日(金)、11日(土)、12日(日)
11:00～19:00

【会場】
三鷹駅周辺

【参加アーティスト】
アート展示：有賀慎吾、うらあやか、
江上賢一郎 × Michael Leung、off-Nibroll、
中崎透、二藤建人、村上慧、山城知佳子、
山本篤、和田昌宏
ライブパフォーマンス：切腹ピストルズ

SYMPOSIUM

12.1

シンポジウム「西を動かす」



【開催日時】
2017年12月1日(金)
18:00～19:45

【会場】
武蔵野美術大学9号館5階515教室

【パネリスト】
及川賢一、酒井博基、長島剛、宮下美穂

【モデレーター】
小川希

REALLY REALLY FREE MARKET

リアリー・リアリー・フリーマーケット



本当に「自由」な交換／交流を探る

古着や不用品を売買するフリーマーケット (flea market) は、日本では「フリマ」として親しまれています。一方、日本語では同じ表記になるので混同されがちですが、「free market」という言葉もあります。経済学の用語で理想的な「自由市場」を意味します。「Really Really Free Market (RRFM)」は、そこに「貨幣からの自由」を加えて、モノだけでなく、スキルやエピソードなどもお金を介することなく交換し、交流する試みです。シンガポールでRRFMを展開しているグループ「Post-Museum」のジェニファー・ティオを招いて、東京版RRFMを開催しました。図書館であるとともに市民の交流や学習の場でもある武蔵野プレイスとの協働企画です。武蔵野プレイス前の芝生の広場に市民やアーティストが出店したRRFMを中心に、館内の一室でモノを交換する「Tokyo Really Really Free Store」、アーティスト Aokid による展示やパフォーマンス、市民とともに作り上げたオーケストラ、ティオを交えたトークショーなどが18日に渡って行われました。

(池田佳穂)

Searching for really 'free' exchange and interaction.

Free market in Japan, has been established the place to trade antiques and unwanted items that someone else could use and called 'Frima'. But the original meaning is economical cognition which means the ideal 'free market'. In addition to that, it tries to be free from money. That is Really Really Free Market(RRFM). It attempts to exchange and interaction not only stuff but also skills and episodes without using money. RRFM in Tokyo version was held by inviting a social activist, named Jenefer Teo, organizing RRFM in Singapore. It was a collaboration project with Musashino place that has a function of library and the place to learn and do activities for citizens. RRFM which citizens and some artists opened stores on the space with grass in front of Musashino place was mainly focused on this event. In addition, some projects have been developed for 18 days, such as Tokyo Really Really Free Store which everyone was able to exchange some stuff in one room, an exhibition and performance event by Aokid, an artist, orchestra created with local people and the talk event with Jenefer Teo.

日時.....2017年7月13日(木)～30日(日)※関連企画を含む

会場.....境南ふれあい広場公園(東京都武蔵野市境南町2-3)、武蔵野プレイス(武蔵野市境南町2-3-18)

参加アーティスト.....ジェニファー・ティオ(Post-Museum)、Aokid

関連企画.....Tokyo Really Really Free Store、コミュニティを築くアートとは(トークイベント)、Aokid city meets Musashino Place(アート展示)、Aokidの海びらき!(パフォーマンス)、むさしのかぜのオーケストラ

Date.....2017.7.13(Turs)-7.30(Sun)

Venue.....Kyonan-Fureai-Hiroba Park, Musashino Place

Artist.....Jennifer Teo, Aokid

Related Event.....Tokyo Really Really Free Store, About creating community through art project(Talk event)

Aokid city meets Musashino Place(Art Exhibition), Opening of swimming season by Aokid(Performance), Musashino-wind orchestra(Performance)

Really Really Free Market

日時……………2017年7月22日(土) 15:00～18:00

会場……………境南ふれあい広場公園(東京都武蔵野市境南町2-3)

参加アーティスト……………ジェニファー・ティオ、Aokid

お金を使わずに、モノやスキルを交換する

夏の照りつける日差しの中、武蔵野プレイス前で「リアリー・リアリー・フリー・マーケット」のメイン企画が開かれました。募集に応じたアーティストやパフォーマー、地元の女性たちなど様々な人々が、芝生の広場に出店し、それぞれのスキルを活かして来場者と交流しました。内容は実に多彩。手芸や占いのブースもあれば、元ヨガ・インストラクターによるヨガ体験会もありました。現役ミュージシャンが来場者の希望に応じて演奏したり、海外でも活動するパントマイムのパフォーマーが来場者とともに即興的な寸劇を撮影したり。お金を介さない交換という新たな「マーケット」を楽しく経験した一日でした。

(鶴田真菜)



Tokyo Really Really Free Store

日時 ……………2017年7月13日(木)～30日(日) 9:30～22:00
会場 ……………武蔵野プレイス 3階 スペースE
参加アーティスト ……ジェニファー・ティオ

暖かな想いも行き交った「フリーストア」

「あなたが他人とシェアしたいもの、譲りたいものを置いてください。もしくはあなたが気になるもの、使いたいものを自由に持ち帰れます。」
「フリーストア」の会場に入るとこのようなガイドラインが掲示されている。そこには連日、地域の人々が多種多様な品々を持ち込み、気に入ったものを持ち帰る。剣道の防具からランドセル、高価なガラスから懐かしい玩具、一見ガラクタのようなものまで並ぶ。そういった品々が2、3日後には持ち帰られ、また新しいものが置かれている。そのサイクルの速さに驚いた。「今日は何が置いてあるの?」と新しい品々を見るために来場する人もいたそう。
お金が介在しない、シンプルなルールだけを定めた空間で、ものがやりとりされた18日間の「フリーストア」。そこには、ものだけではなく暖かで手触りのある想いも行き交っていた。
(池田佳穂)



コミュニティを築くアートとは

日時 ……………2017年7月22日(土) 19:00～21:00
会場 ……………武蔵野プレイス 4階 フォーラム
ゲスト ……………ジェニファー・ティオ

シンガポールの経験に聴き入る

シンガポールで Really Really Free Market (RRFM) を2009年から続けている Post-Museum のジェニファー・ティオをゲストに招いてトークイベントを開催しました。シンガポールと日本の RRFM の違いや、ティオがシンガポールで展開している地域コミュニティをベースにしたプロジェクトについても話をうかがいました。自然体でありつつも芯のある活動ぶりから、プロジェクトを通して様々な垣根を超えたコミュニティを生み出している印象を受けました。2020年を控えた東京が、シンガポールで展開されているコミュニティプロジェクトから学ぶことがたくさんあるように思えました。
(池田佳穂)



Aokid city meets Musashino Place

日時2017年7月13日(木) ~ 30日(日) 9:30 ~ 22:00

会場武蔵野プレイス(武蔵野市境南町 2-3-18)

参加アーティストAokid

表現が溢れ出る! Aokid がはじけた真夏の日々

武蔵野プレイスの建築は白く、角が丸みを帯びています。たくさんの窓から入った光が吹き抜けの空間に広がっていく、柔らかい印象の図書館です。その建物のあちこちに、Aokid のさまざまな作品が潜んでいました。図書館を駆け上がる少年の映像、パフォーマンスでも使われたブルーシートの造形物、そして絵画やドローイング。少年の思いが溢れるような作品が、光があふれる図書館と出会い、幸福な雰囲気が広がる。そんな展覧会でした。

(池田佳穂)



Aokidの海びらき! ~君はもう、泳いでいる。~

「初夏、Aokidとタップリ踊るくんと音符ちゃん、むさしのプレイスのうた!」

日時 2017年7月17日(月) 15:00~16:00, 19:00~20:00

会場 境南ふれあい広場公園(東京都武蔵野市境南町 2-3)
武蔵野プレイス(武蔵野市境南町 2-3-18)

夏空の下、自由にエネルギッシュな踊り

「海の日」にあった Really Really Free Market の関連企画は、Aokid による屋外パフォーマンスとミニライブの2部構成でした。

第1部「Aokidの海びらき」は、武蔵野プレイス前の広場にブルーシートを敷いて海に見立てました。真夏の晴天の下、Aokid が水着姿で登場。準備運動の後、子供たちとともにブルーシートの上を泳いで、なんとも愛らしい光景を見せてくれました。水泳の後はダンス。夏の定番ソングをBGMとして力強くしなやかなダンスで観客を魅了しました。

夕暮れからの第2部は、タップダンサー米澤一平とシンガーソングライターよだまりえとのコラボ。ダンサーの動きやシンガーの歌声に合わせてながらパフォーマンスを展開。最後は、Aokid が作詞作曲した「むさしのプレイスのうた」(非公認)を観客とともに合唱し、武蔵境の夏の夜に爽やかな余韻を残しました。

(浪江航一)



むさしのかぜのオーケストラ

～耳をすましてダンスをすれば、さあコンサートが始まっている～

日時 …………… 2017年7月27日(木) 18:00～20:00

会場 …………… 武蔵野プレイス(武蔵野市境南町2-3-18)

人と場所から楽器と音楽が生まれる

Aokidの呼びかけで集まったメンバーが武蔵野プレイスを舞台に1日限りの、楽団を結成しました。場所そのもの、人そのものが楽器です。ふだん私達に備わっているが、十分に使えていない、感覚や身体の部分に意識を集中します。音楽がどんなものか、電子ピアノでまず一人ずつ確かめました。

そして武蔵野プレイス全体の空気を感じながら楽譜を構成。壁を撫でたりはじいたりしながら進むと空気が波のように振動します。手足をダンスのように動かせば、体からリズムが生まれます。

音楽はいよいよ完成間近。賑わいのある1階ロビーを抜けて表に出ると芝生の庭と中央線のホームが見守ってくれているようでした。図書館の利用者の皆さんとAokidと「むさしのプレイスのうた」(Aokid作)を歌ってオーケストラはフィナーレを迎えることができました。

場所が、人がアートになる。集まれば、奏できれば。そんなメッセージを共有してみんなが武蔵野プレイスの一部になれた、記憶に残るイベントでした。(浦夏子)



NISHI-OGIKUBO FILM FESTIVAL 2017

西荻映像祭 2017 - 不可分な労働と表現 -



店舗空間に触発され「労働と表現」を考察

「西荻映像祭 2017」では、新進気鋭のアーティスト 7 組が西荻窪駅周辺の店舗を舞台に映像作品を発表しました。今回のテーマは「不可分な労働と表現」。店主独自の審美眼によりセレクトされた商品やサービスから成る空間に着想を得て、作品が展開されました。独自の感性を貫きながら同じ時代を歩む店主やアーティストの姿勢は、表現を続けることの厳しさの可能性を感じさせました。

(高村瑞世)

Consideration of labor and expression inspired by store space

In 'Nishi-Ogikubo Film Festival', young and energetic seven artists published video works in the shops around Nishi-Ogikubo station. This time, theme of the festival was inseparable labor and expression. The work was developed by getting idea from space consist of some products and services selected by owner's original sense of beauty. The artists and owner's style that insist of the original sense and living in the same age make us feel the possibilities of harshness and difficulties of continuing to express.

日時.....2017年8月23日(水) ~ 27日(日)

会場信愛書店 en=gawa、旅の本屋のまど、HATOBA、ハンサム食堂、ピリヤード山崎、フジクリーニング、高架下空き店舗

アーティスト伊阪柊、奥田栄希、田中良佑、土屋萌児、橋本匠、林千歩、東野哲史

Date.....2017.8.23(Wed)-8.27(Sun)

VenueSinai Book Store en=gawa, Nomad Books, HATOBA, Handsome Delica, Billiard Yamazaki, Fuji Cleaning, Space under Viaduct

Artists.....Shu Isaka, Eiki Okuda, Ryosuke Tanaka, Hoji Tsuchiya, Chiho Hayashi, Tetsushi Higashino, Takumi Hashimoto

Shu Isaka

伊阪柁 × 旅の本屋のまど

Portal Yantra

頭上に浮遊する映像が導く「異界」

書店の本棚の狭間に、異界へつながる穴がぼっかり口を開いている。会場となった旅の本を扱う店には、昔の美容室にあったパーマ機のようなドームが浮かぶ。この半球に頭を差し込み、映し出された映像をみる。手元のコントローラーで、頭上を漂う本のようなアイコンを手繰ると瞬時にワープ。書店にいながら旅をするという趣向だが、何か変だ。伊阪柁が世界で収集した大自然や建築物の映像は、極端に歪みねじ曲がっている。とんでもない場所にとばされてしまったのか。

私たちが生きるこの世界は11次元でできているという新しい物理理論がある。4次元を超える時空は、我々の目の前に小さく小さく畳み込まれているかもしれないというのだ。

未だ実証されぬ先端理論を先鋭的な表現で可視化する。ふだん見ている世の中がすべてではない。リアルはただひとつではないかもしれない。サイエンスとアートをやぶにらみしながら示す多世界解釈がここにある。

(岩尾庄一郎)



Eiki Okuda

奥田栄希 × HATOBA

Bug No.10 / GLITCH / Kung-fu boy

ゲーム機が問いかける“遊びと労働”

カラフルな衣料品の並ぶ HATOBA。その2階へ上ると洗練された空間の中に、2つのゲーム機がポツリと置かれ、壁には1枚の絵画がかかっている。奥側の赤と白が懐かしい「ファミコン」を操作すると何かがおかしい。攻撃しても敵は倒せず再生される。なによりジャンプができないことが不自由に感じられる。手前のゲーム機のモニターはなぜかバグの画像を映し出している。絵画もよく見るとバグの画像……。

本来ゲームには人々を楽しませるために様々な仕掛けがあるのだが、奥田のゲーム機はまるで、遊び（表現）を失い、日常化した労働のようにも思える。現実の生活の中で、楽しみ（表現）をなくしてしまったらどうなるだろう。また、バグ（失敗）は嫌がられるが、その画像は視点を変えれば美しく見えるかもしれない。

奥田の展示から、見方・とらえ方によって異なる遊び（表現）や労働のあり方を考えさせられた。

(増子千博)



Ryosuke Tanaka

田中良佑 × 高架下空き店舗

疲れ果てた夜に忘れかけた夢を夢に見る see you in the dream /
I want to be a POKEMON HERO

日々を労働にさいなまれつつ見る夢は…

40年以上続く「西荻マイロード商店街」の一角にある空き店舗。この春「社会人」になったばかりの田中良佑は、学生の時は自分のためにあった「時間」が、ほぼ全て「労働」に奪われていくことに驚きを覚えます。「もっといろんなことを知りたい、もっといろんなところに行きたい、もっといろんな人に会いたい」という熱い欲望を身体に抱えたまま、彼は今日も労働に励みます。ひどい疲れが容赦なく「思い出」や「思考の断片」を奪おうとします。映像作品「疲れ果てた夜に忘れかけた夢を夢に見る」は、彼の地元でもある西荻窪にある思い出の公園を小学校時代の友達と訪れ昔の話をします。東京と中国の映像を交錯させながら描かれる穏やかでありのままの映像は、BGMと結びつきながら現実性を強めていきます。彼の心配とはよそに、これまでの人生は色あせることなく彼の中に存在していました。(三浦留美)



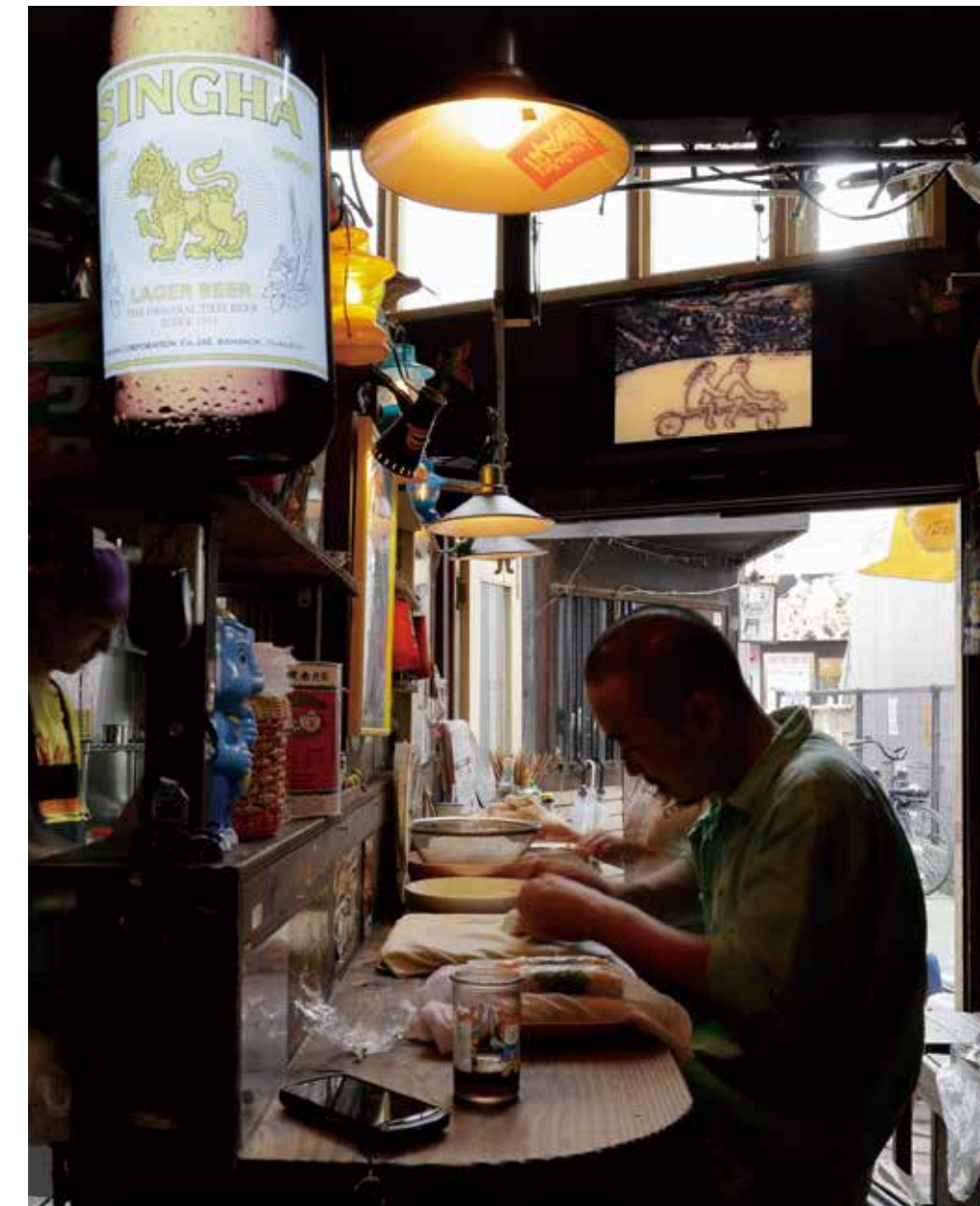
Hoji Tsuchiya

土屋萌児 × ハンサム食堂

The Singing Line/2013 / Hurricane Animation / たしやうかうごふ / 夜道

日々の喜びに気づかせるコマ撮りアニメ

紙やペン、バナナの皮など身近な素材を使ったコマ撮りのアニメーション作品を発表している土屋。今回は、東南アジアの屋台を思わせるタイ料理店「ハンサム食堂」の一角にモニターを設置して作品を上映した。緻密な手作業が見て取れる映像には、サラリーマンやビル、バイクに乗る男女など、日常的なシーンが多く描かれる。リズムカルな音楽に合わせて展開する作品は、忙しく過ぎ去る日々の中に潜む小さな喜びに気づかせてくれるようだ。(高村瑞世)



Chiho Hayashi

林千歩 × フジクリーニング

ぜんぶ夏のせい

バカンスを楽しむ芸術家のカリカチュア

今回、林千歩は、西荻窪で70年以上営業を続けるクリーニング店、フジクリーニングで映像作品を展示しました。林自身が扮するのは、フルーツを食べながら芸術を語るアーティストのカリカチュア。

意味のない作品をつくる必要ない / ポリティカルとか無理 / 論理的に考えて語る人、苦手 / 文脈、は? / 才能ある作家は、何を作ればいいのか解る。 / 説明しきれないような作品 / 自分でも説明出来ない作品 / 直感的に造ったものは素晴らしい / 一番、鋭い / 夏は本当に嫌い

真夏のバカンスを楽しみながら、論理的な描写や、文脈も拒否して創作のパッションのみで作品を作る事を切々と語る。夏を嫌いながら、バカンスを楽しむアーティスト。戯画的に描写された芸術家の肖像が、観る人に直感やパッションの重要性を訴えます。心も身体もリフレッシュ! レッツクリーニング!

(立山周一郎)



Tetsushi Higashino

東野哲史 × 信愛書店 en=gawa

男の世界 / I Saw the Light / nekoth

映像と展示 二つの空間が融合

信愛書店 en=gawa の店主が働く姿が映し出される。続いて作家東野哲史自身が、何やら作業をしている映像が映し出される。それは、まるで父親（店主）の仕事を真似ている子供のように見える。

ふと、空間の奥から子供の笑い声が聞こえる。目を向けると東野の子供の愛らしい笑顔が映し出されている。子供を溺愛する父親（東野）の視線がそこにはあった。

中央のテーブルには、ネコのスライドショーや映像内でつくられていた物が置かれ、壁際に目をやると古書や事務備品やダンボールに紛れ写真やインスタレーションが置かれている。決して整っているとは言い難いその空間は仕事場をイメージさせ、作品と融合し男の働く姿がそこには見えた。

(佐藤卓也)



Takumi Hashimoto

橋本匠 × ビリヤード山崎

superplay

夢と現のあわいに誘う映像パフォーマンス

橋本匠は創業 85 年の歴史をもつ「ビリヤード山崎」で、2 階の空間を舞台に、全 6 回の映像を使った即興のパフォーマンスを行いました。

ビリヤード台のなくなった 2 階には、店主の好みでしょうか、絵画や洋書が置かれています。パフォーマンスが始まると彼の視点を追うように、普段はビリヤード場の背景として存在を主張することのないものが次々と映し出されます。映像にあわせて連想ゲームのように言葉が紡がれます。言葉のもつイメージは身体を使って表現されますが、発せられた瞬間から形を変えていきます。長い年月が降り積もった空間だからでしょうか、時間も空間も曖昧になっていき、夢と現実の狭間を行き来するような時間が現れました。

(林真実)



PERFORMANCE DAY

パフォーマンス・デイ - 秋のカラダ収穫祭 -



高架下空間に現れた「ゴリラ」と「宇宙人」

ゴリラ？ 宇宙人？ 高架下から異色のパフォーマンスが生まれた。小雨がち
らつく秋空の10月。JR 東小金井駅高架下の広場を野外劇場に仕立てあげ、
1日限りの演劇イベント「パフォーマンス・デイ～秋のカラダ収穫祭～」が
開催されました。ゴリラの格好をしたおじさんが現代社会を憂い、人間の
本質を訴えかけたかと思えば、全身白タイツの男3人が白枠に囲まれたス
ペースをトイレに見立て朗読劇を行ったり、宇宙空間の中でおにごっこをし
ているかのように観客を追い回したり。高架下は2組の演者により、体験
したことのないパフォーマンスに対する驚きと笑いに包まれました。

(浪江航一)

Gorilla and Aliens, suddenly appeared in under railway space.

Gorilla? Alien? The unique performance has born in under railway space. It was a light rain autumn
weather in October. The one-day play event, called Performance Day A Body Harvest Festival in Autumn ',
has held in under railway space. The man wearing Gorilla costume worried about recent society and
appeal the nature of human-being. Also, three men wearing white zentai read aloud old story in the
toilet, just surrounded by white wood flame. They also run around the space to chase the audience.
Because of two pairs performances, the under railway space was filled with joyful and surprise which we
have never experienced.

日時 2017年10月15日(日) 15:00～18:00
会場 コミュニティステーション東小金井(東京都小金井市梶野町5-10-58)
出演 FAIFAI - 快快 -, KPR / 開幕ペナントレース

Date..... 2017.10.15(Sun) 15:00-18:00
Venue..... Community Station Higashine-Koganei
Artists..... FAIFAI, KPR

ファイファイ

FAIFAI - 快快 -

THE 人間

リングが実り、ゴリラのいる、愛すべき日常

リングが木になっている。続いてバナナやくるみ、ブドウ。実り豊かな秋の「収穫祭」で、高架下に登場したのはゴリラ。なぜか紙芝居を読み始める。ファッションブルで哲学的な紙芝居だ。読み上げるゴリラの声は意外にも美しい。そのちぐはぐな魅力に引き込まれた時に、ゴリラは世を憂えるおっちゃんに変身する。

演じているのは劇団「FAIFAI - 快快 -」の山崎皓司。そのパフォーマンスは全てが「本物」だ。観客は果物を収穫して持ち帰ることができ、お土産に鉢植えが配られる（山崎はその種の行末を本気で案じているという）。「ひとつひとつの本気と優しさがたまらない」と観るものを幸せにしていく。山崎が演じるのは、愛すべき日常の世界なのだ。

(前川遙子)



Kaimaku Penant Race

KPR / 開幕ペナントレース

移動式トイレ、宇宙おにごっこ

白タイツ集団 トイレから宇宙まで遊泳

「開幕ペナントレース」のパフォーマンスは、白タイツに全身を包んだメンバーが東小金井駅南口商店街周辺をイベントチラシを配布しながら練り歩くことからスタートしました。街の人々は彼らに興味津々。

メンバーが会場に到着すると、白い木枠で囲われた1畳ほどの空間をトイレの個室に見立てた「移動式トイレ演劇」の上演へ。宮沢賢司の童話「よだかの星」の朗読と身体のみで、密室での知的行為と生理現象を可視化させます。彼らの熱演に会場は大爆笑。そして宇宙服のようなヘルメットをかぶったメンバーが、名曲「ジュピター」にのせてスローモーションで観客を追う『宇宙おにごっこ』へ。場は大いに盛り上がり、終演時には暖かな拍手が起こりました。

全てのプロセスの指揮をとったのは演出家・村井雄。実は終始、来場者のなかに潜んでいました。

(遠山尚江)



TERATOTERA FESTIVAL 2017 "Neo-political"

テラトテラ祭り 2017 Neo-political ～わたしたちのまつりごと～



「政治」の解釈を伝える体験型展示

JR 三鷹駅周辺で開催した大規模展示「TERATOTERA 祭り2017」のテーマは「Neo-political ～わたしたちのまつりごと～」。「まつりごと(政)」は「祭祀」や「政治」を意味する古語です。現代を生きる私たちにとっての「まつりごと」とは何か、という問いかけに10組のアーティストが応えました。他者が受け止めている重力を体感することで他者への想像力を喚起する作品や、沖縄の歴史と現状を示唆する映像とパフォーマンスなど、アーティストが独自に解釈した「まつりごと」を観客に体験してもらった展示になりました。

(池田佳穂)

The experimental exhibition to tell interpretations of 'politics'

Theme of TERATOTERA Festival 2017, the large scale of exhibition held around Mitaka station, is Neo-Political Art ~Our Matsurigoto~. 'Matsurigoto' is an archaic word in Japanese which means religious services and politics. 10 artists answered a question 'What is Matsurigoto for those who lives in present day?' Audience was able experience 'Matsurigoto' in the exhibition that each artist interpreted this question themselves. For example, the art work that drew the people's attention to imagination of others by experienced the gravity that others received, video and performance that suggest history of Okinawa and now.

日時…………… 2017年11月10日(金)、11日(土)、12日(日) 11:00～19:00

会場…………… 三鷹駅周辺施設、空店舗など10カ所

アート展示…………… 有賀慎吾、うらあやか、江上賢一郎 xMicheal Leung、off-Nibroll、中崎透、二藤建人、村上慧、山城知佳子、山本篤、和田昌宏

ライブパフォーマンス…………… 切腹ピストルズ

Date…………… 2017.11.10(Fri),11.11(Sat),11.12(Sun) 11:00-19:00

Venue…………… Mitaka Station Surrounding Area

Artist…………… Shingo Argua, Ayaka Ura, Ken-ichiro Egami, Micheal Leung, off-Nibroll, Toru Nakazaki, Kento Nito, Satoshi Murakami, Chikako Yamashiro, Atsushi Yamamoto, Masahiro Wada, Seppuku Pistols

テラトテラ祭り 2017 のテーマ「Neo-political ~わたしたちのまつりごと~」について

漠然とした不安が頭をもたげる。何かがさし迫っているのだがどうすることもできない焦燥感。変わらないと思っていた日常が非日常へと急速に変貌をとげ、分厚い暗雲が頭上に立ち込めてくる。

6年半前、大地が大きく揺れて以降、言いようのない不安の影はわたしたちの生活を徐々にだが確実に覆うようになってきている。原発事故、集団的自衛権、普天間移設問題、憲法改正、ヘイトスピーチに共謀罪。国外に目を移せば、絶対にありえないと言われていた大統領が誕生し、世界中で難民や移民問題は未だ解決策を見出せていない。近隣諸国との歴史認識の溝は埋められないばかりか、核の恐怖が現実忍び寄りつつある。

こうした中、日本でも Political（政治的）な表現が、ここ数年よく見られるようになった。ただその多くは、作品制作のために政治問題を扱っているようにも見えてしまい、わたしたちの生活からはどこか遠い印象を受けてしまう。アートというゲームの中だけで成り立つ Political Correctness（政治的に適切）な表現の蔓延。

では大きく変動をとげるこの社会の現状に対して、わたしたちは個として何もできないのだろうか。大きな流れに身を委ねることだけしか選択肢は残されていないのか。今回の TERATOTERA 祭りでは、『Neo-political ~わたしたちのまつりごと~』というテーマを掲げた。参加をお願いした作家たちは、個人的な興味や問題から作品を制作し、一見すると政治的な表現とはほど遠いイメージを持つものが多い。ただ僕には、彼ら、彼女らの個人的な表現が、どこかでより大きな問題へと繋がっているように感じてならない。大文字の政治ではない、個からしか辿り着くことのできない新たな政治的な表現。

今回、一点だけ作家にお願いしたことがある。それは観客を自らの作品に何らかの形で巻き込んで欲しいというもの。政治とはその社会に生きるすべての人が参画すべきものであって、他でもないわたしたち自身の問題なのである。個人としてしか触れることのできない、まつりごと＝政治の手触りをこの3日間を通して訪れた人たちと共有したい。

TERATOTERA ディレクター 小川希

A vague uneasiness is rearing its head. A feeling that something terrible might happen, yet there is only a sense of helpless frustration, of not knowing what to do. I had thought this peaceful everyday life would last forever, but it seems that everything is changing rapidly. Thick, dark clouds are looming overhead.

Six and a half years ago, since the great earthquake shook the ground beneath us, an indescribable, restless shadow has slowly, but certainly come to envelop our everyday lives. The nuclear accident, the right to collective self-defense, the relocation of the U.S. Marine Corps' Futenma air station, constitutional amendment debates, hate speech and the new conspiracy law. Looking outside of Japan, a president whose election was once deemed impossible, has taken office, and no valid solution has been found for refugee and immigration issues worldwide. The gaps in historical recognition between neighboring countries have never been fully bridged, and more frighteningly, the terrible threat of nuclear attack is coming closer to a reality.

Under such social circumstances, political artwork seems to have increased in Japan. However, it appears to me that artists are just taking these political issues as reasons for making art, and there are big gaps between their political works and actual everyday lives. Artists and people working in the arts have become increasingly aware of "political correctness" but it is only shared within this game we call "art."

However, is there really nothing we can do to affect significant social change as individuals? Is simply abandoning ourselves to the greater flow of events the only option? The theme of TERATOTERA Festival 2017 was "Neo-Political Art ~Our Matsurigoto(Politics)~". The artists participating in the festival mostly created works based on their own personal interests and emotions, and at first glance their works seemed to be far removed from political artistic expression. However, I do believe that the personal creations of these men and women connect with bigger social issues somewhere. Not "political art" with a capital P, but "neo-political art", something that can only be grasped through the individual self.

For this exhibition, there's only one thing I asked the artists of. That was to somehow involve the audience in their work. Politics is something in which all people living in society need to take part. It belongs not to the other, but to each and everyone of us. With all the people who visited us during the three days, I wanted to share a sense of politics that could only be touched upon by and through the individual.

TERATOTERA Director Nozomu Ogawa

有賀慎吾

Unknown Material lab

謎の液体を調査される、ミステリアスなラボ

まず、展示会場に足を踏み入れるのに勇気がいる。雑居ビルの一角で扉もないのだが、一歩踏み込むと、そこは異様に静かな空間。無表情の白衣の女性から手渡されたカルテに簡単な情報を書き込むと、再び沈黙の時間が訪れる。なかなか名前を呼ばれないので、部屋の中をうろつくと、何かの製造過程が見えてくる。黄色のきのこ、黄色い石、ぐつぐつと煮える液体からは蒸気が上がっている。これは……。不安感でいっぱいになった頃に名前を呼ばれ、黄色の液体を渡される。これを……。躊躇していると、白衣の女性は静かに話した。「飲むも飲まないもあなたの自由」。とりあえずぐつと飲み干し、釈然としないままその場を後にする。白衣の女性はずっと遠くを眺めている。

(前川遙子)



Ayaka Ura

うらあやか

葬式のあと、赤ちゃんの話をして少し大丈夫になったから

逆方向を見ながらともに緑道を歩く

「初めて自分の悩みのようなものを作品にした」。頬を赤らめたうらあやかが、打ち上げの席でそう口にした。彼女の作品は玉川上水緑道で行われたパフォーマンス。作家と観客は正反対の方向を向いた状態で横に並び、行きはカウントアップ、帰りはカウントダウンをしながら、ともに一本道を行って帰って来る。そして最初の場所に戻ったとき、行きと帰りの歩数の差が記され白いボタンがひとつ縫い付けられた黒い布が観客に渡される。体験を終えた観客の多くが「結構差が出た」とか「後ろ歩きがこわかった」と呟く。その表情は皆どこか曇りがちだ。

うらの「自分ではどうしようもない」という気持ちは作品を通じて参加者に伝播し、そのもやもやを受け取った参加者はしばらく立ち止まり思考していた。それはまるで、打明け話にどう応えようかと観客が考えているように見えた。作品を通じて彼女の悩みは、彼女だけのものではなくなっていったのかもしれない。

(宮崎有里)



Ken-ichiro Egami x マイケル・ルン

江上賢一郎 x Michael Leung

路上の学校

路上を解き放ち、活かす方法を学ぶ

三鷹駅北口を出たすぐのところに小さな広場がある。交番横のこの空間に3日間だけ現れた掘立小屋が江上賢一郎の「路上の学校」。ルールだけで窮屈になってしまった路上を解放し、新しい路上の使い方を学ぶ場所である。1日目はフィリピン出身で現在日本に移住して以降、ラジオを介し一般市民の目線で報道活動を行なっているジョン・パイレーツをゲストに迎えて〈独立ラジオの作り方〉を学び、2日目は香港で屋上庭園や公共の屋台運営など様々な路上空間の実践を行っているマイケル・ルンをゲストに迎えて「Urban Interventions (都市的介入の技法)」について語り合った。3日目は『完全自殺マニュアル』で知られるライター鶴見済をゲストに迎えて「0円ショップ in 三鷹」と3日間それぞれ内容が異なるカリキュラム。通りゆく通行人が足を止め、話を聞いたり、作業をしたりと、通行のための空間が解放され新しい空気が流れ込む。参加者はこの路上に生活の場、社交の場をみたであろう。

(山上祐介)



オフ・ニブロール

off-Nibroll

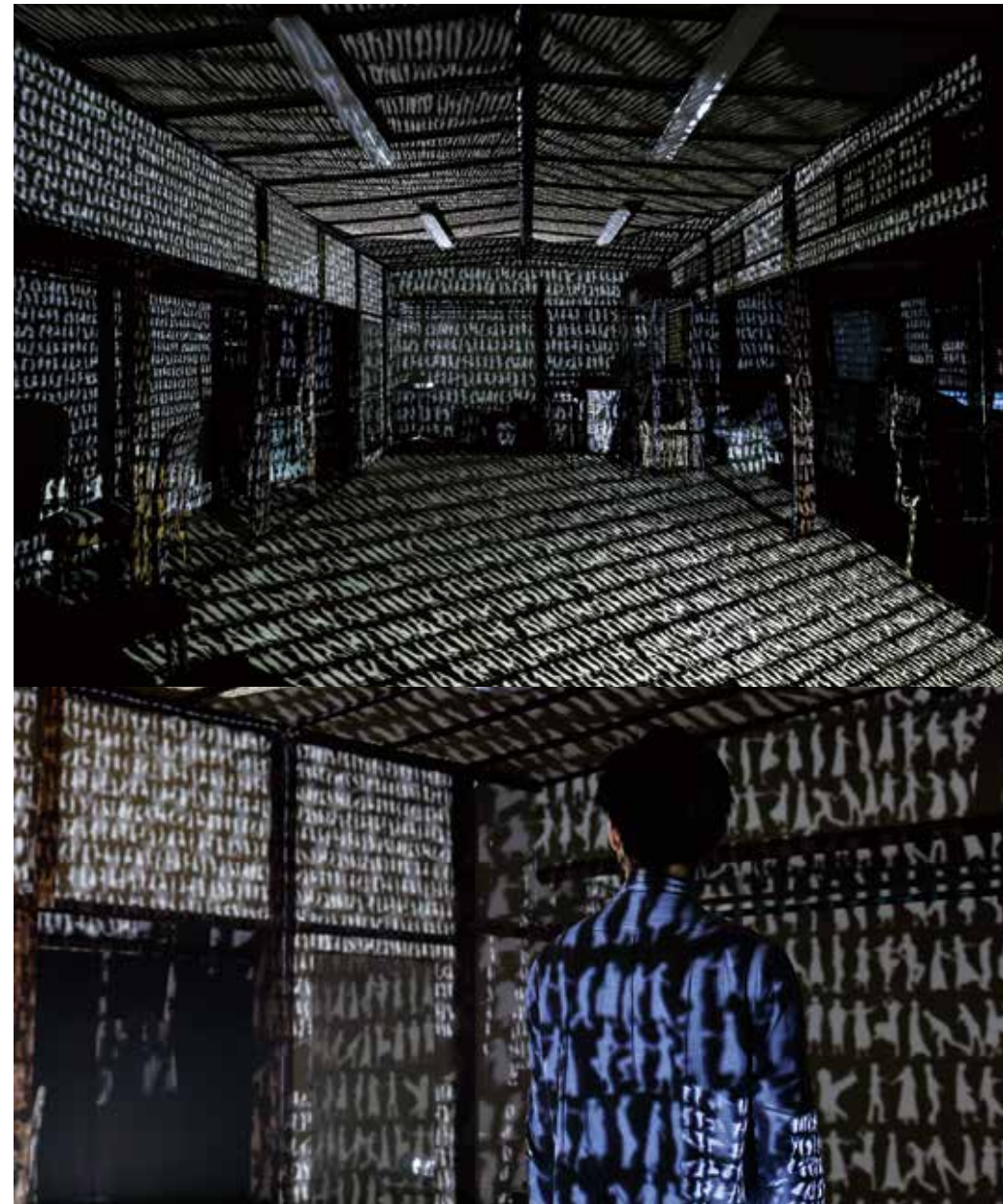
a world

歩き続ける人影が創る世界の煌めき

「a world」は、振付家・矢内原美邦と映像作家・高橋啓祐のユニット off-Nibroll の作品。世界各地で矢内原が振り付けた人々の歩く姿を、高橋が映像化した。2010年の制作だが、今回、TERATOTERA 祭りのテーマに応じて再構成された。

会場は旧製麺所の倉庫。人の営みの痕跡をとどめる空間に時を刻む音が響く。暗闇におびただしい数の光のシルエットが動いている。それは人々がどこかに向かって歩く姿だった。それぞれのスタイルでのパレードは続く。5台のプロジェクターを駆使して映し出される、圧倒的な人の群れが、複雑に絡み合い、^{まがゆ} 蔭が這うように壁や床を覆い尽くす。やがて眩い人影の群れはフォーメーションを変え、暗い海に浮かぶ五つの大陸を形作る。その楽しみで希望に満ちた煌めきは極夜をも照らす灯りとなる。

(前川順子)



Toru Nakazaki

中崎透

ちょっとした選択が少しだけ世界を変えることがある

遊びながら「世界を変える」体験を楽しむ

会場の「HYM」は、一つのフロアに複数の飲食店が並ぶフードコートのような空間です。その一角、普段は様々なグッズを販売しているスペースを中崎が改変しました。出現したのは、アミューズメントパークのような空間です。観客は会場のあちこちに掲示された指示書にしたがって、木製の楯にカラフルなボールを滑らせたり、棚の上に載る豚の置物に向かってティッシュペーパーを投げたり。子供たちやカップルが思い思いに楽しんでいました。でも、この空間を中崎がゼロから作り上げたわけではありません。実は、豚やアヒルの置物はもともと天井からぶら下がっていたものだし、楯を支える木箱や椅子は販売用の商品でした。そう、中崎が「ちょっとした選択」で創り出した空間で、観客も自らの選択で展示を変えていく体験を楽しんだのでした。

(西岡一正)



Kento Nito
二藤建人

誰かの重さを踏みしめる

他人の重みを体感し、その立場を考える

三鷹駅北口を出て左、スクールバスのバス停近くに突如、とんでもなく目を引く2つの装置が現れました。二藤建人による来場者参加型作品「誰かの重さを踏みしめる」のための装置です。

これらの装置はそれぞれ、自分が日ごろ足の裏で感じている自身の体重をゼロにし、「自分のものではない別の人間の体重」を実感できる仕組みになっています。

他人の体重になってみることによって、他人の重さの「質感」が自分のものと異なることを知ることができました。違和感を覚えると同時に、その人が普段何を感じているのかな、どんな違いがあるのかなと考えたりもしました。相手の立場に立ってみるといふ行動に対しての新たなアプローチ方法が生まれたのでした。

(小川真由子)



Satoshi Murakami
村上慧

看板図書館

駅前広場のコタツで本を読む

人々が騒々しく行き交う三鷹駅南口デッキ広場。その一角にはコタツと本棚が。本棚に並ぶ本の表紙は、どうやら近くにある「お店の広告」らしい。店主・村上慧の笑顔が弾けている。ためらいがちに手に取ると、本の中身は絵本あり、小説あり……。勇気ある人はコタツでお茶をいただきながら、しばし本の世界へ。人々が、怪訝そうに、不思議そうに、あるいは面白そうにチラッと目を向けて通り過ぎていく。本を閉じるとまた目に入る「お店の広告」。ん？ 広告⇔本⇔コタツの読者⇔通りすがりの人たち。ふふっ。どこから見てもなんだか生活のにおいが漂ってくる。ん？ ここは「村上さんの家」の中？ 好きだなあ〜、こういうの。こういう時間。
(都賀田一馬)



Chikako Yamashiro

山城知佳子 (パフォーマンス出演: ShOh, Miya)

ヒューマンビートボックス・War

口腔から放たれる轟音で恐怖を体感

爆音をとどろかせるヘリコプター、爆弾の風切り音、巨大な爆発、入り乱れる銃撃、また爆発、延々と続く音の洪水……。ここは東京・三鷹駅近くの商店街にある一室。やがて爆撃と銃撃のなかからリズムが生まれビートが刻まれる。轟音の正体はヒューマンビートボックス。ビートボクサー ShOh と Miya による人間の喉と口腔から放たれる音だ。山城知佳子は、「あいちトリエンナーレ 2016」で発表した映像作品『土の人』で使ったヒューマンビートボックスを前面に立てて、映像とコラボレートさせた新作ライブパフォーマンスを行った。会場の壁面には、太平洋戦争末期・沖縄戦のフィルムと、ライブにきた客の生の映像が映しだされる。東京にいなから激しい爆撃と銃撃にさらされた客たちは、否応なく戦争の圧倒的暴力を恐怖することになる。

このライブのわずか2カ月後、沖縄では米軍のヘリ不時着事故が相次いでいる。そういえばあの会場には、南の島の土の匂いととも、硝煙の匂いも漂っていたような気がする。

(岩尾庄一郎)



Atsushi Yamamoto

山本篤

REMAKE

暗中模索の模写が産み出す「何故か」

何故か。その問いが生まれる事を、その問いの答えが分からない事を、僕たちは芸術と呼んでいる。山本の作品は、芸術を産んでばかりだ。

TERATOTERA 祭りの開幕前、告知用にした山本の作品の紹介文を、私はこう締め括った。その時点では「何故か」の意味はいまひとつわかっていなかった。山本が実際に行ったパフォーマンスは、大型の黒板にピカソの『ゲルニカ』を模写する、というもの。黒板の正面には何故かピッチングマシンが置かれている。模写すべき『ゲルニカ』のコピーは部屋の入口に貼られているのだが、山本は何故か目隠しをしている。観客から描くべき位置の指示を受けて、山本は文字通り暗中模索で模写しようとする。と、突然、ピッチングマシンが高速のボールを打ち込む。ボールは黒板の中心に当たるよう設定されているのだが、その轟音で山本は描くべき位置を見失ってしまう……。

不条理ともいうべきパフォーマンスを目した観客は、五感で考えたのではないだろうか。山本が企んだ何故かを。

(荒田靖仁)



Masahiro Wada

和田昌宏

過去を忘れた明日の物語、もしくは明日をなくした過去の物語

布が織りなす「記憶の襞」を彷徨う

和田昌宏の展示会場は武蔵野芸能劇場の小ホール。大量の布を入れ違いに吊るしてその隙間の空間で2つの映像作品を上映しました。1つは、「MAKE AMERICA GREAT AGAIN」と書かれた赤いキャップを被った和田の妻が、足蹴り車で遊ぶ息子が無表情で見つめながらラジコンのコントローラーを操作し続けるもの。もう1つは、視聴者に向けて催眠術を試みる男の様子で、「君が代」の音声と日本国旗の画像で締めくくられるものです。40歳を超えた和田は、年々記憶が曖昧になる自身への不安からこの作品の着想を得たと言います。いくつもの布が層をなす、幻想的で迷路のような空間は人々の脳内の隠喩でしょうか。布をかいくぐって歩く鑑賞者の姿は、先行きのみえない不透明な社会を彷徨う人々の姿を感じさせました。

(遠山尚江)



切腹ピストルズ

駅前広場に突如出現したお祭り騒ぎ

野良着姿の男衆が徐々に三鷹駅北口の交番前広場に集まり、突如和太鼓や笛、鉦、エレキ三味線などを用いて、どこか懐かしい、でも激しい音色を奏で始めました。「現代のチンドン屋」と評される「切腹ピストルズ」です。総勢10名以上による演奏が、駅前広場周辺を野外ライブ会場へと、通行人を観客へと瞬間に変貌させました。日本人に馴染み深い民謡や祭りの歌がパンクにアレンジされ、心地よさと高揚感があいまって、自然と体が左右に揺れます。あれよあれよと観客は増え、乱痴気騒ぎ寸前のところで、演奏は終了。約40分にわたって、老人から子供まで自然と楽しませた彼らの演奏は、伝統芸能の新たな形を示してくれました。

(浪江航一)



「政治と芸術」

“政治”との距離感を語り合う

作家が自身の問題や興味を取り上げることで、政治的なテーマを直球で扱う作品から政治的な表現には一見見えない作品まで多彩な内容だった今展。トークイベントでは参加作家たちがそれぞれの「政治と芸術」について語り合いました。「政治」が遠い世界で起こる問題であれば他人事になるでしょうし、逆に身近で私的な話題であれば前のめりで聴きたくなるものです。イベント終了後に改めて小川ディレクターの言葉に共感した参加者も多かったでしょう。「政治と芸術は面白い」と。香港出身のマイケル・ルンの存在が国ごとに異なる政治観を相対的に見せ、トークの展開を重層的なものにした印象でした。

(石水典子)

(写真左から)
村上慧
うらあやか
有賀慎吾
二藤建人
小川希
山城知佳子
和田昌宏
山本篤
off-Nibroll (2人)
マイケル・ルン
江上賢一郎

村上慧

チェーン店とかにいくと餌を食べているような気がする、作られた世界。地域のお店をインタビューして行く中にも政治的な関係性がある面白い、広告の大きさがバランスをとっていたが政治的な体験をしたと思う。

有賀慎吾

この人が言っているからといって流されがちな選挙、こういった他者の言動や行為が意思決定に関係するのは選挙だけでなく日常にある気がする。自分の手の届く範囲の政治性や身体性をテーマにしたかった。

うらあやか

みんなの作品は政治に対立しているように思える、私は対立関係は特に感じない。アーティストのやりたいことを来場者にやらせる、参加型アートって政治的かもしれない。

二藤建人

政治が他人事であるうちは、それに関わったり、自分の意思を表明する気持ちにはなれないと思う。日本で行われている政治は流されやすい方に流されてしまうと感じる。

和田昌宏

ネゴシエーションは日々の戦い、僕・相手含めて色々な人が虐げられている。家族が小さなポリティカルだと思う。住んでいたところが基地の近くにあり、攻撃の対象が身近にあるのは少し怖かった。

off-Nibroll

色々な国、色々な人を1人1人撮影し、国や人種でカテゴリ化したが見ただけ見ると対して違いがなかった。国や人種はただの記号だと思った。

山本篤

ゲルニカを僕たちの時代で再制作したかった。どういったものになるのか、どうすればできるのかとても気になったからだ。記憶の曖昧さや対話とか、それらをつなぎ合わせながらゲルニカを描くという行為に対して色々な解釈ができればと思った。

マイケル・ルン

世界的にみても政治的な状況がよくない方向へ変わっていく中、公的支援を受けている団体が政治をテーマに扱った展覧会を開くのはとても重要で素晴らしいと思う。どの国、地域にいても政治的、社会的なことを知ろうとするスタンスは大事である。

山城知佳子

沖縄では政治が流行りのテーマではなく、呪縛的な感じ。テーマにせざるをえない状況からどう切り離すのかで苦しむ。日常の中の会話、オスプレイとかの重低音で途切れ、お腹に音が響いていく感じ。そういったサウンドを意識した。

江上賢一郎

アジアやヨーロッパをリサーチすることが多い。アジアでは彼らの作品が政治的、社会性を無視できないというのは自然にわかる。アーティストやアクティビストといったカテゴリは関係ない、政治的なテーマというジャンルはあんまり意識していないと思う。



SYMPOSIUM "Move the West"

シンポジウム「西を動かす」



東京ウェストサイドの潜在力を掘り出す

東京でありながら都会でも地方でもない“中途半端”な地域・西東京。多くの美術大学があり、ユニークな活動をしている施設が点在していて、面白いアートに触れられる機会もあるのに、多くの人が都心の美術館へ足を運ぶのはなぜでしょうか？ 西側に住む人が東側へ向かう際、「東京へ行って来る」と言ってしまうのはなぜなのでしょう？ 八王子や多摩、小金井といった西東京に、東側と同じような求心力はありません。ですが西側でしか作り得ない人との関わり方、距離の近さ、仕事のあり方、豊かさがあります。大きな転換期を迎える2020年に向けて、その地域資源を生かし、まちに変革を起こすことはできるのでしょうか？ 東京西側のポテンシャルを探るシンポジウム「西を動かす」が、12月1日(金)に開催されました。

会場は、近い将来アート業界を支えることになるであろう若者たちが集まる東京都小平市にある武蔵野美術大学。参加者の中にも多くの学生の姿が見られました。彼らが卒業・就職を機に都心へ向かわず西側にとどまるメリットを提示したいところです。パネリストに、NPO法人AKITENの代表で八王子市議会議員の及川賢一、株式会社モーフィングの酒井博基、多摩信用金庫 地域連携支援部長の長島剛、NPO法人アートフル・アクション事務局の宮下美穂と異色の顔ぶれが揃いました。ここに TERATOTERA のディレクター小川希がモデレーターとして加わり、多角的な視点から西東京を解説。そしてまちの機能や力を引き出す方法を探りました。

(石水典子)

※写真左から酒井博基、及川賢一、長島剛、宮下美穂

日時……………2017年12月1日(金) 18:00～19:45
会場……………武蔵野美術大学 9号館5階515教室(東京都小平市小川町1丁目736)
パネリスト……………及川賢一、酒井博基、長島剛、宮下美穂
モデレーター……………小川希

Date……………2017.12.1(Fri) 18:00~19:45
Venue……………Musashino Art University
Panelists……………Ken-ichi Oikawa, Tsuyoshi Nagashima, Hiroki Sakai, Miho Miyashita
Moderator……………Nozomu Ogawa

The symposium 'Move the West'

The Westside of Tokyo is the 'ambiguous' place, neither city nor countryside in spite of Tokyo. Even there are a lot of opportunities to experience art such as art universities and unique art spaces, why do people go to the city museum? Why do people living in Westside of Tokyo to tend to say 'I'm going to Tokyo' when they go to Eastside of it.

The Westside of Tokyo, such as Hachioji, Tama, and Koganei does not have a centripetal power as same as Eastside. However, there are the only way created by Westside to communicate with others, nearness, state of work, and fullness. Toward 2020, coming to the big transition, Can we make it happen to the town by using local resources? The symposium, Move the West, was held to search for possibilities of Westside of Tokyo in 1st December. The place was the Musashino Art University located in Kodaira-shi, Tokyo, and gathered students to support art industry near future. People could see many students among the audience. It is willing to show them benefit to stay Westside not going central city when they find a job. In the symposium, unique panelist gathered; Ken-ichi Oikawa, member of Hachioji city council, Hironobu Sakai; Morphing inc, Tsuyoshi Nagashima; Credit association of Tama, the chief director of local cooperation support, Miho Miyashita; Artful Action. In addition to them, Nozomu Ogawa, Director of Art Center Ongoing, joined as a moderator. They search for the way to draw out the power and function of the town through various way of thinking.

【小川】 今日「西を動かす」と題して、東京の西側でアートを介した活動をされている方々をお招きしました。2020年のオリンピックに向けて西側でどういった動きができるのかについて話していきたいと思います。

【酒井】 株式会社モーフィングの酒井と申します。モーフィングは武蔵野美術大学の学生が在学中に、美大生と社会を繋げたいと国分寺で立ち上げた会社です。今年で11年目になります。「PARTNER」という美大生向けの総合情報メディアや、「BAUS」というクリエイター向けのプラットフォームを運営しております。今日は「西を動かす」というテーマなので、私なりに地域での働きかたについて考えてきました。自分を中心にした距離感で、問題意識が変わってきます。半径5m以内が家庭内、500mぐらいが生活圏内、地域は5kmぐらい。500km以上は日本と世界の問題かなと思っています。なので、半径5km以内に家庭・生活圏と地域、プライベートと仕事が織り混ざる形になっています。自分がアクションしたことが自分の生活圏内、地域を魅力的にしていけることが、地域での仕事の特徴と思っています。



酒井が手がけたプロジェクトの一つ、中央線高架下家族の文化祭

【宮下】 NPO法人アートフル・アクションの宮下と申します。小金井市が芸術文化振興計画と芸術文化振興条例をつかった時に、その理念を実現するのは市民であるということから、その担い手としてアートフル・アクションが2012年に発足し

ました。小金井市の委託事業などを受けつつ、武蔵小金井駅近くの「KOGANEI ART SPOT シャトー 2F」でカフェとギャラリースペースを運営しています。今年(2017年)3月から、中村研一記念小金井市立はげの森美術館に併設されたカフェの運営もやっています。それぞれの事業が垣根がなく運営されているので、例えばギャラリーに来てくれたアーティストが、委託事業で学校にアーティストを呼びかけたとしたりとか、カフェのお客さんが新しいプロジェクトを持って来たり、地域の環境問題について教えてくれたりということが日々起こっています。最低限のルールを守ってくれたら、基本的に何をやってもいいよと言っているので、市民がそれぞれの関わりと責任の中で、ヒエラルキーのないフラットな状態で事業をやっています。私たちが模索している公共性、あるいは公共圏は行政の力では作り出すことはできないもので、顔の見える市民同士がそれぞれのアイデアで、公共的な活動をしている。そこが端的な特徴なのかなと思っています。



アートフル・アクションが開催した「high blood pressure 展」。ポーランドから招いたアーティストの話聴く小学生たち

空き店舗をアートで活用、商店街再生へ

【及川】 我々(NPO法人AKITEN)の活動の発端は、八王子駅前の商店街に空きテナントが増えていたことです。空きテナントのオーナーに「ただで貸してください。僕らが商店街に人を呼びますから」と話して、僕らが空きテナントに入り込む。最初にやったのは、空きテナントをアートギャラリーとして使うことです。そこにアーティストに入ってもらって、こういう使い方もあると気づかせることができる。空き



AKITENが手がけた事業の一つ、「AKITEN PARK」(撮影:鈴木竜馬)

テナントを障害者の就労支援のためのカフェにした事例もあります。空き店舗を障害者の施設として使うには東京都のバリアフリー条例が厳しかったのですが、僕が市議会議員なので議会で提案して、八王子市ではバリアフリー条例を緩和されるように働きかけました。行政や街づくり会社と一緒に頑張っていたら、空きテナントの数が減って、今は「テナントを探している」と依頼が来てなかなか紹介できないくらいになりました。「西を動かす」ということに関していえば、僕らは八王子を拠点に活動しています。八王子の魅力は都会が持っていない山や川、畑や田んぼをたくさん持っていて、また一方で、田舎が持っていない街並みとか人口を持っている。これをうまく見ることができると、八王子の魅力をもっと活かしていけるのじゃないか。この理想像を行政に対しても提案していく。市もシティプロモーションをしているので同じ方向を向きながら動いているのかなと思っています。行政が動きにくい場合は、僕らが動いてしまおうし、行政の力も必要な時にはNPOとしても提言し、また議会でも提言もするというので、いい感じで行政と付き合いながら、街づくりをしています。

【長島】 私は多摩信用金庫の地域連携支援部に勤めています。市役所や大学、大手企業や中間支援機関、国などにいろんな活動をしようと言わせていただいて、それをプロジェクトにしています。いま数十本のプロジェクトが動いています。「西を動かす」ということなので、多摩地域の特徴を共有したほうがいいかなと思



多摩信用金庫が2013年から発行している多摩地域の総合情報紙

い、4つの特徴をまとめてきました。まず緑が多いこと、次に大学とか高専が多いこと、芸術文化人がいっぱい住んでいるということ、それから研究開発型の企業が結構あるんです。そこに26市3町1村と、30の市町村があって、7つの商工会議所と21の商工会がある。そこに420万人もの人がいる。残念ながら都庁は新宿にある。一生懸命にどうしようかと悩んでいる人もいるのは確かだけれど、そこそこ豊かな街なので危機感があまりない街だと思います。人口とか、従業員数、製造品出荷額とか見ると、47都道府県と比べると10位ぐらいにいるわけですね。地域の問題としては、子供、コミュニティの課題が満載でNPOが多くなっています。私がやってきたことの中で、他の方々と重ならないこととお話すると、市役所の皆さんを集めて勉強会をやってきました。市役所が金融機関を集めるのは日本中に結構あるんですが、その逆はあまり例がない。東京都の中で、市町村とか23区が集まって何かをやるとうと、場所は都心になるわけです。でも青梅とか奥多摩の方々はなかなか行けない。それであれば立川あたりで都心と同じクオリティーのものを、ということで、我々が東京都や国の施策を勉強してきて、それを市役所の皆さんにお伝えしています。こういう場づくりをNPOや市民団体にもやっていただければ、もっと広がるんじゃないかなと思っています。

【小川】 2020年に東京オリンピックが開催されるので、いろんなイベントが起こってくる。オリンピックの会場は東側にありますが、2020年を機会として西側でも

いろいろな動きが起こってきたら面白いと思います。そのときに、西側にはこういうものが足りないというものがありますか。

【長島】 足りないものはもうないというぐらい、行政も含めているんな人がいるんなことをやっていると思います。もう少し（そうした動きを）組み合わせていくとか、出会いを作っていくと、もうちょっと活性化していくと思いますけど、豊かに暮らしていればいいかなと思う人もいるわけだから、なんかやるうという方向だけじゃなくてもいいのかもしれない。例えば外国の方に来てもらえる観光スポットにしたいという話が出てきますが、それを好まない人もいるはずなので、中庸をとっていき感じでやっていければいいと思います。

美術大学をつないで可能性を探る

【小川】 酒井さんは自分の身の回りを楽しくすることが原動力としてであると話されていましたが、まだ楽しさが足りないという感じなんですか。

【酒井】 楽しさが足りないわけではなく、例えばクリエイターと仕事しても、自分たちが収めたものがどういうふうに通流して、誰の手に届いているのか、自分の生活の圏内にどう影響を及ぼしているかが実感できない。地域に対して還元できる

仕事が増えてくるといいなと思って、意識的に作っていった感じですね。この地域の特徴を考えると美大が多いんですね。武蔵野美術大学に多摩美術大学、東京造形大学もあります。これをつないでいく仕組みができてくると、何か可能性が出てくると思います。モーフィングは今年オフィス

を都心に移転したんですが、国分寺で創業した会社です。国分寺はいい距離感で都心にも近いし、多摩地域とか美大生にとって交通の結節点だと思うんです。そこで、国分寺に美大生達がいるんなプロジェクトを仕掛けていけるスペースを（2017年）10月にオープンしたら、大手の企業がコラボレーションしたいといってくる。そういう状況が徐々に作り出せ

ている感じです。

【小川】 宮下さんは西側になにか足りないものを感じていますか。

【宮下】 西側というより、自分たちのことを考えると、出自が小金井市の計画だったりするから、ずっと小金井市民を相手にしているみたいなプロジェクトの運び方ですね。内向するなかで出て来る力を蓄えることもあるんだけど、閉塞感にもなっている。流動性を高めるためには、個人的にも、NPOとしてももう少し活動エリアを広げていきたい。例えば私たちが札幌のプロジェクトをやってもいいと思うし、来年はヨーロッパやアジアの人に来てもらって展示をしようと思っています。そこで私たちが力を蓄えたり、経験を積むことが西側への貢献につながっていくならば、そういうやり方もあるかなと思います。

【小川】 西側って遠いからなかなか人が来てくれないという常套句があります。でも、（東側から）そんなに遠くないし、住んでる人も多い。西側に美術館なんかがあってもいいんじゃないか。及川さんは市議員で文化的な活動もなさっていて、そうした現状をどう見えていますか。

【及川】 東京都も国も西側には文化芸術施設をほとんど持ってないですよ。八王子で活動していて街の魅力を伝えようとすると、デザインやアートでその魅力を気づかせることが必要なんだけど、そもそもその需要がない。普段から街の中にデザインもアートも少ない、ないから需要が育っていかない。自分たちのようないくつかの団体が活動を続けてきて、やっとクリエイターが少しずつ住み続けるようになった、というのがこの1、2年くらいの変化かなという感じですね。

【小川】 僕も吉祥寺で自分のアートスペースをやっているんですが、地元の人には全然来ないですよ。武蔵野市の人もアートを見るときには、もっと都心に行くんです。西側の芸術的な指数みたいなものが低いのかな。長島さんはどう分析されていますか。

【長島】 わかんないですね。でも芸術家の人と話をしていると、「実は私小平なんですよ」とか「実は私、ここ（多摩地域）に住んでいるんですよ」とかみたいな話はしょっちゅう聞きます。都心にいる人たちの3分の1ぐらいは多摩にいるわけですね。

【小川】 大きい施設がないから、小さい施設でやっていくことしかできないんだけど、そこに入った人しか楽しめない状況になっているのがもったいない。それをブレイクスルーする手段はないのでしょうか。

【酒井】 文化的なイベントと言っていていかわからないですけど、美大の学園祭には人が来ますよね。街の人も来るし、都心からもデザインとかアートとか関心がある人が来る。注目すべきだなと思いますね。大学も地域に開いていたり、大学同士が連携して、そこに民間も関わっていく仕組みができれば、と思うんです。

【小川】 ヨーロッパだと大学が結構中心となって文化を動かしてる。西側に美大がそろっているならば、学生が芸術的にこの地域を引っ張っていけるんじゃないかと思うんです。

【酒井】 地域で文化がしっかり醸成されると、学生は卒業してからも自分にとって大事な場所として位置付けられる。地域に還元されることが大きくなってきます。

【及川】 八王子は日本でも1、2を争う学園都市です。でも、商店街とか企業側も学生に対して期待と失望が入り混じった状態になっている。途中でプロジェクトが頓挫してしまったりとかで、大学とは二度とやりたくないみたいな「黒歴史」があったりするんですよ。その歴史を変えようと、学生を商店街に連れて行って、商店主と一緒に新しいプロダクツやプロモーションを考えさせたんですけど、成功したのは半分ぐらいでした。学生の就職については、八王子の学生が卒業後も八王子に住んで就職してくれたら返さなくていい奨学金を議会で提案して、実現しました。毎年50～60人ぐらいですかね、それを取得する学生がいます。その学生に市内の企業を紹介することにも力を入れています。

多様な人々の個性が触れ合う地域へ

【小川】 西側がもっと面白く動いていくことに、皆さんビジョンとか希望とかありますか。

【長島】 多摩地域って一言では言えない街で、いろんなことを考える人もいっぱいいる。ややこしい街だから、やりたいという人がいたら、その人たちをつなぎ合わせていくことが仕事かなと思っています。画期的に活性化していくことを望んでいない人もたくさんいるわけだから、そういった意味では個人の個性とかが豊かに触れ合えるような街にしていくのが一番いいんだろうなと思っています。

【及川】 東京の東側で通用することって日本のトップで、世界にも通用することなので、同じことを西側でやっても意味はない。西で何か動かすんだとしたら、西でできない暮らし方や働き方、学び方、過ごし方とかをやって、その個性を出していく。都会と田舎の両方持っている強さを出していくことかな。

【宮下】 私たちがカフェを運営している「はげの森美術館」は、洋画家・中村研一の遺族から小金井市に寄贈された美術館です。私は興味がなかったのですが、にわか勉強をしてみたら、藤田嗣治が訪ねてきていたりとか、大岡昇平が近所に住んでいたりとか、結構面白さがあるかもと思い始めています。自分の足を丁寧にトレースしていくと、密度の高い場所とか出来事というのは生まれてくるんじゃないかなと思っています。

【及川】 今日は、違う角度から西を動かそうとしている人たちと話して、自分が見えてなかった視点や、自分が持っていたポテンシャルに気づかされました。参加者もいろいろ混ざってきて、そのつながり方を踏ん張ってやっていけば、よりダイナミックな動きになってくるのかなと思います。



ARTISTS' PROFILE

作家プロフィール

西荻映像祭 NISHI-OGIKUBO FILM FESTIVAL



Shu Isaka
伊阪 柊

映像作家。様々な場所の地質構造や、地質学的な現象に関心を持ち、不可視的な領域にどこまで多弁なパースペクティブを注入することができるかを映像メディアを用いて考えつつ、映像特有の説得力を模索している。またそこに建てられた建築物や、複雑に関係し合う文脈をヒントに異なる文脈を発生させるような機構を制作している。主な個展に「pherical Habitat」(PARADISE AIR / 2016)、グループ展に「Mother - 大地の霊性」(モデルルーム / 2017) などがあ



Eiki Okuda
奥田 栄希

1985年東京生まれ。東京藝術大学美術研究科絵画-油画専攻修了。古いテレビゲームを題材に絵画から映像表現を行う。近年は主に、延々と終わらないゲームや、バグを利用したゲームなど、市販の80年代のゲーム機で動作するゲームカセット作品を多数発表している。その過程はゲームプログラムを作成し、基盤にハンダ付け、ひとつのカセットにパッケージするところまで全て手作業で行われる。

リアリー・リアリー・フリーマーケット REALLY REALLY FREE MARKET



アオキッド
Aokid

東京造形大学映画専攻出身。ダンス作品やパフォーマンスを主に発表しながら一方でこつこつと絵や文章などを描きためて、まとめたり展示としても行う。TESなどのダンスカンパニーへの参加を経て、aokid cityという観客参加型パフォーマンス作品や、「どうぶつえん」というゲリラパフォーマンスイベントの企画も行っている。方法を試しては加えながら日々、変形と進化と退化の不安と希望の中にいるけどok。



ポストミュージアム
Post-Museum

シンガポール在住のアーティスト、ウーン・ティエン・ウェイとジェニファー・ティオを中心に活動するアーティストグループ。社会問題を軸に、アートを通し人と人をつなぐ場づくりのために様々な企画を実施している。世界各国で実施される、金銭を介さないフリーマーケット「Really Really Free Market」をシンガポールで始動し、隔月で実施。そのほかにも、コミュニティやネットワーク形成に繋がる活動を継続的に実施している。



Ryosuke Tanaka
田中良佑

1990年香川県出身。2014年東京造形大学造形美術学科絵画専攻卒業。2016年ポーランド ヴロツワフ美術大学交換留学。2017年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。主な展覧会に2016年「ERASMUS」(Aula/ ヴロツワフ、ポーランド)、2015年「STRONG SMART 賢明と傷心」(3331 Arts Chiyoda/ 東京)、「躊躇」(HIGURE/ 東京)、2014年「大館・北秋田芸術祭 2014 里に犬、山に熊」(大町商店街 / 秋田)、「泪の上で」(泪橋交差点角 OKビル、/ 東京) などがある。2013年「MEC AWARD 2013」佳作。2012年「BEPPU ART AWARD」所属アートグループ「階段部」入選。



Hoji Tsuchiya
土屋 萌児

1984年東京生まれ。2004年から映像作品の制作を始める。現在ベルリンを拠点にアニメーション作品を発表し続けている。



Chiho Hayashi
林千歩

美術家。東京藝術大学油画科博士課程に在籍。過度なメイクを施した自身の身体を表象とし、様々なキャラクターに扮した自らを演ずる。無意識下を伏流するオブセッションに貫かれた諸相に、変身、あるいは脱皮が展開される。映像を中心に写真・立体・平面・ダンス・パフォーマンスなど様々なメディアに展開する。主な展覧会に、個展「パパ、ごめんなさい」(Art Center Ongoing/ 東京 / 2014)、「牛窓・垂細亜芸術交流祭」(岡山 / 2014)、「島からのまなざし」(東京都美術館・TWS/ 東京 / 2014) 他多数。



Tetsushi Higashino
東野 哲史

1976年滋賀県生まれ。武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン学科卒業。非生産的生産活動という名目のもと、日常の取るに足りないものごとや単なる思いつきに対してのレスポンスを制作の起点として、インスタレーション、ビデオ、Web、パフォーマンスなど、メディアを問わず展開する。近年の主な展覧会: 2017年「C-C-D」(Edmund Felson Gallery / ベルリン)、2016年「滝川」(Art Center Ongoing / 東京)、2015年「アートと都市を巡る 横浜・台北」(BankART Studio NYK / 横浜) など。

パフォーマンス・デイ PERFORMANCE DAY



FAIFAI - 快快 -

2008年結成。東京を中心に活動する劇団。複雑な現実、メディア状況に多様かつポップな手法をもって挑み、国内外で注目を集める。2010年代表作「My name is I LOVE YOU」でスイスのチューリヒ・シアター・スペクタクルにてアジア人初の最優秀賞受賞。2012年「りんご」が第57回岸田國士戯曲賞候補となる。ハイバイ岩井秀人氏を演出に迎えた「再生」(2015)は2000名を超える動員を記録。近作では、ホテルのスイートルームで上演した近作「CATFISH」(17)も話題を呼んだ。
http://faifai.tv



kaimaku penant race
KPR / 開幕ペナントレース

2006年結成。東京発のシアターカンパニー。初の海外公演(2009年、アメリカ)にてThe New York Times 他、各種メディアより評価を得る。2015年よりスタートした海外ツアーでは、その「恐るべき俳優達による現代演劇作品(Tuniscope / チュニジア)」は「本物のアーティストックな体験」(La Provence / フランス)であり「この衝撃的な作品を観てしまったら、もはやこの"地上"へ帰還することはできない」(Theatrorama / フランス)と賞賛される。また、1万個のトイレットペーパーによる超巨大便器をオールスタンディングのシアタートラムに出現させる(2016年東京公演)等、その空間構成と美術にも注目が集まる。受賞歴多数。

TERATOTERA 祭り 2017 TERATOTERA FESTIVAL 2017



Shingo Aruga
有賀慎吾

1983年長野県生まれ。2009年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業、2015年東京藝術大学美術研究科博士課程修了。平面、立体、映像、インスタレーション等、作品形式は多岐に渡るが全ての作品は黄色と黒の色彩に統一されており、テーマとしては「超過去・超未来」という視点から現在を「超現在」として捉え直し、人間の新たな可能性についてのトライアルとしてのアートを目指している。主な個展に、2014年SSS - Space Spiral Spirit (Art Center Ongoing / 東京)、他多数。



Ayaka Ura
うらあやか

1992年神奈川県生まれ、武蔵野美術大学油絵学科卒業。相反する物事を反転若しくは攪拌する装置としての作品を目指す。主な個展にBallroom dance lesson(V54/ 香港)、The body dances freely(Art Center Ongoing/ 東京) 主なグループ展に 対馬アートファンタジア (対馬)、PARTY(Art Center Ongoing/ 東京) など。



Ken-ichiro Egami
江上賢一郎 (リサーチャー / 写真家)

1980年福岡県生まれ。早稲田大学、ロンドン大学ゴールドスミス校 文化人類学修士課程修了。留学中よりアートとアクティビズム、オルタナティブな自立空間のリサーチを開始。現在はドローイング・写真制作、アジア圏を中心としたオルタナティブスペースのリサーチとネットワーク作りを行っている。訳書にデヴィッド グレーバー『デモクラシー・プロジェクト』(航思社)、論考に「Art of the Nuclear War - Collective Creation and Movements」、Creative Space-Art and Spatial Resistance in East Asia, 2013, DOXA, Hong Kong



オフ・ニブロール
off-Nibroll

off-Nibrollは2005年に映像作家高橋啓祐を代表とし舞台主体であるカンパニー Nibroll が off (オフ) の時に、振付家矢内原美那も時々活動参加するユニット。身体を通して得られる感覚を場所や他者にあてはめ映像と空間で浮かび上がるものを展示作品や小パフォーマンスに発表している。2007年せんだいメディアテーク、2009年大原美術館、BankArt1929、SKIP シティ映像ミュージアム、アーツ前橋等にて展覧会に参加し、2004年上海ビエンナーレ、2016年瀬戸内国際芸術祭、越後妻有アートトリエンナーレといった国際展への参加をはじめ制作、発表をおこなっている。2004年森美術館 MAM コンテポラリーアート賞、2005年オーストラリア・グラーツアートプロジェクト・BIX メディアコンペティション優秀賞、第9回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦優秀作品賞、2007年広島現代美術館 Re-Act 展市民賞などを受賞。
off-Nibroll http://keisuke-kt.com/



Seppuku Pistols
切腹ピストルズ

「反近代」を旗印に、おもに和楽器による演奏で全国各地を練り歩く。日本各地に散らばる隊員はおよそ20名。奉納演奏、村祭り、ライブハウス、デモ、芸術祭など、神出鬼没な演奏を得意とし、地方探索と研究、農、職人、寺子屋、落語など、隊員それぞれが展開している。その主張や野良着の風貌から「江戸へ導く装置」と呼ばれる。



Toru Nakazaki
中崎透

1976年茨城県生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。現在、茨城県水戸市を拠点に活動。看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、形式を特定せず制作を展開している。展覧会多数。2006年末より「Nadegata Instant Party」を結成し、ユニットとしても活動。2007年末より「遊戯室(中崎透+遠藤水城)」を設立し、運営に携わる。2011年よりプロジェクト FUKUSHIMA! に参加、主に美術部門のディレクションを担当。



マイケル・ルン
Michael Leung

ロンドン生まれ、香港在住のデザイナー。都市農業実践者。香港旧市街、油麻地を中心に、アーバン・ガーデニング、都市養蜂、コミュニティ・デザイン等の空間プロジェクトを手がけている。近年はハンドメイド商品や自主製作雑誌、音楽を扱う路上屋台「Kai Phong Pai Dong」を共同運営している。これらのプロジェクトを通じて、デザインの領域を超えて、都市におけるコミュニティの再構築、食料の自給、労働の自律を実現していくための具体的な実践を行なっている。



Kento Nito
二藤建人

1986年埼玉県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了。身体を通して得られる感覚を、場所や他者にあてはめ浮かび上がるものを作品にしている。主な個展に2017年「たゞ吹き抜ける風」(Art Center Ongoing)、^レ凍てつく雲のふわふわ」(gallery N 神田社宅)、主なグループ展に2017年「のっぴきならない遊動」(京都芸術センター)、2016年「NEW VISION SAITAMA 5 迫り出す身体」(埼玉県立近代美術館)、「あいちトリエンナーレ2016」(東岡崎会場)、他多数。



Satoshi Murakami
村上慧

1988年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。社会的存在としての体を制作する。主な個展に、2015年「移住を生活する」(Gallery Barco / 東京)、2016年「家の提出」(awai art center / 長野)。グループ展に、2016年「瀬戸内国際芸術祭」(小豆島)、2017年「OpenART Biennale」(Orebro, Sweden) 他多数。初の単行本「家をせおって歩いた」(夕書房)発売中。



Chikako Yamashiro
山城知佳子

アーティスト、映像作家。沖縄で生まれ沖縄県立芸術大学で絵画と写真、インスタレーションを学ぶ。2004年以降、写真、映像作品を世界各国の展覧会(あいちトリエンナーレ2016、第8回アジアパシフィックトリエンナーレ、オーストラリア、The Jewish Museum, サンフランシスコ、Move on Asia、韓国など)で発表。2009年、東京都写真美術館開催の第2回恵比寿映像祭に招待参加し、他者の戦争体験を継承することは可能か? をテーマにした継承シリーズ「あなたの声は私の喉を通った」(2009年)、「沈む声、紅い息」(2010年)で映画を意識した制作へと移行する。2010年から本格的に映画制作と撮影を実践で学ぶ。イメージフォーラム・フェスティバル2016ニューフィルム・ジャパン日本招待部門招聘上映。YIDFF山形国際ドキュメンタリー映画祭2017にて上映。



Atsushi Yamamoto
山本篤

1980年東京都生まれ。多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業。映像やパフォーマンスを中心に活動している。主な個展に、2016年「2016」(Art Center Ongoing / 東京)。グループ展に、2017年「奥能登国際芸術祭」(旧小泊保育所 / 石川県珠洲)、2016年「スーパーオープンスタジオ“SOMETHINKS”」(アートラボはしもと / 相模原)、2016年「国立奥多摩映画館」(国立奥多摩美術館 / 青梅) 他多数。



Masahiro Wada
和田昌宏

東京都生まれ。Goldsmiths College University of London, BA Fine Art 卒業。近年の個展に2016年「R μ v-1/2g μ vR=(8 π G/c^4)T μ v」(LOKO GALLERY)、「どしゃぶりの虹(YAMAMBA)」(Art center Ongoing)。主なグループ展に2017年「奥能登国際芸術祭」(旧小泊保育所)、「シルバニアファミリーピエンナーレ2017」(XYZ)、2016年「富士の山ピエンナーレ2016」(旧蒲原劇場)、2015年「あざみ野コンテンポラリー vol.6 もう一つの選択」(横浜市民ギャラリーあざみ野)、2014年「国東半島芸術祭「希望の原理」」(旧香々地町役場)、「ヨコハマトリエンナーレ2014」(横浜美術館)、他多数。



Ken-ichi Oikawa
及川賢一

NPO 法人 AKITEN 代表 / 八王子市議会議員
1980年東京都八王子市生まれ。東京都立大学大学院(経営学修士)修了。ソニー(株)、経営コンサルティング会社を経て、八王子にcafé Wを共同設立した後、2011年より八王子市議会議員(無所属)となる。AKITENの代表としてアートプロジェクトおよび、アートギャラリー / アーティストインレジデンスの運営をするほか、食、繊維、林業など様々なまちづくりのプロジェクトの運営にも関わる。八王子のデートスポットを紹介するTV番組「恋する八王子彼女」プロデューサー。



Miho Miyashita
宮下美穂

特定非営利活動法人アートフル・アクション事務局長
2011年から小金井アートフル・アクション!の事業運営に携わる。ここでの事業の多くは、市民、インターン、行政担当者、近隣大学の学生や教員、アーティストなどの多様な主体の多様な形態の参加によって成り立っている。多くの人のノウハウや経験が自在に主体的に活かし合われ、事業が運営されていることが強みである。日々、気づくときさまざまなエンジンがいろいろな場所で回っている。ヒエラルキーではなくパッチワークのように自発的で多様な表現活動が折り重なり、洗練されて行く可能性を日々感じている。



Tsuyoshi Nagashima
長島剛

1988年多摩中央信用金庫入庫。1997年「多摩らいふ倶楽部」を立ち上げ。以後、多摩地域活性化のためのネットワーク作りに従事。2009年たましん事業支援センター長、2011年より多摩信用金庫地域連携支援部長。同年「課題解決プラットフォームTAMA」の運営開始や「東京・多摩のおみやげプロジェクト」の立ち上げに関わる。2013年には創業支援センターTAMAを開設。多摩コミュニティビジネスネットワーク世話人を務めるほか、自治体との連携にも精力的に関わる。



Nozomu Ogawa
小川希

TERATOTERA ディレクター、Art Center Ongoing 代表
1976年東京生まれ。2003年東京大学大学院学際情報学府修士課程修了。2007年東京大学大学院学際情報学府博士課程単位取得退学。2002年から2006年にわたり、横浜のBankARTや東京の廃校を舞台とし、1970年代生まれの作家を対象とした公募展「Ongoing」を主催。2008年に東京・吉祥寺に、芸術複合施設「Art Center Ongoing」を設立し、現在同スペースの代表をつとめる。



Hiroki Sakai
酒井博基

1977年、和歌山県生まれ。武蔵野美術大学大学院修士課程修了。慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科博士課程中退。アートなどの文化芸術活動を「企業や地域の課題を解決する創造的なコミュニケーションの媒介」ととらえ、企業やブランドマーケティング価値を最大化する、戦略的コミュニティマネジメントを専門領域としている。代表するプロジェクトは「六本木未来会議」「中央線高架下プロジェクト(コミュニティステーション東小金井)」「LUMINECLASSROOM」などを手がける。グッドデザイン特別賞「地域づくり」をはじめ、受賞歴多数。法政大学非常勤講師。

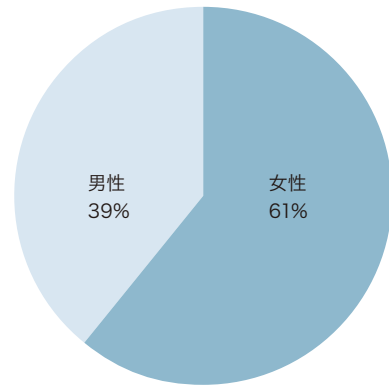
SUMMARY OF QUESTIONNAIRE

来場者アンケート

TERATOTERA はイベントの来場者を対象にアンケートを実施しています。その結果は、今後の広報や活動に生かしていきます。また、中央線沿線という幅広い年齢層が様々なカルチャーに触れているエリアの声を収集することは、TERATOTERA だけではなく、その他アートプロジェクトにとっても参考になると考えます。

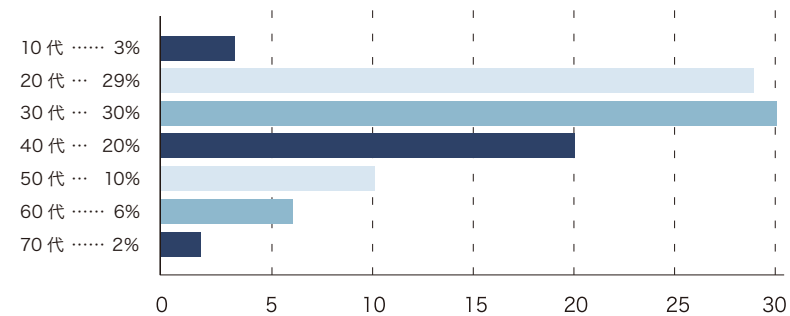
Q1 性別

全体では女性の方が若干多い結果となりました。Really Really Free Market では女性の割合がさらに高く、パフォーマンス・デイでは男性の割合が高い傾向がありました。コンテンツやテーマによって男女比率は変わるようです。



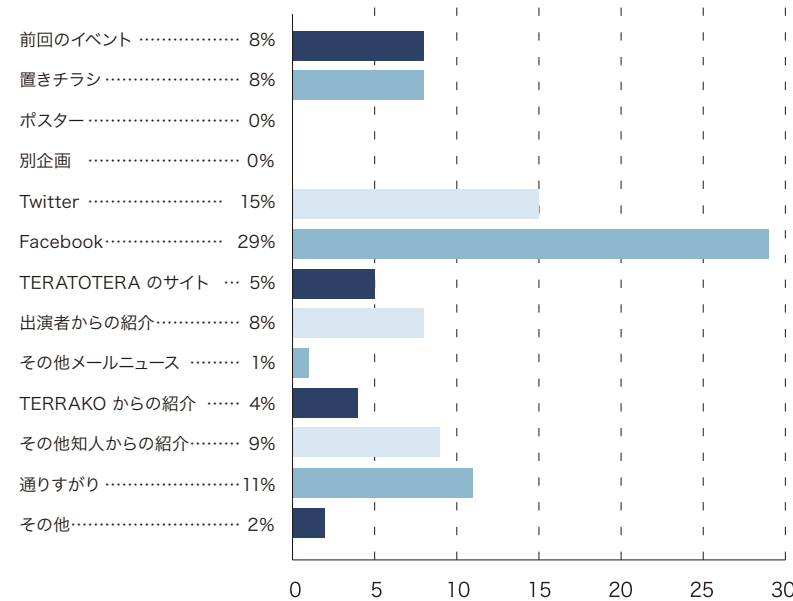
Q2 年代

20-30 代が最も多い結果となりました。Really Really Free Market や TERATOTERA 祭りではファミリー層が多く来場され、30 代が 40% を超えました。TERATOTERA 祭り単独で見ると、50 代以上の方の来場が多く、設定したテーマの影響があるのではと感じました。

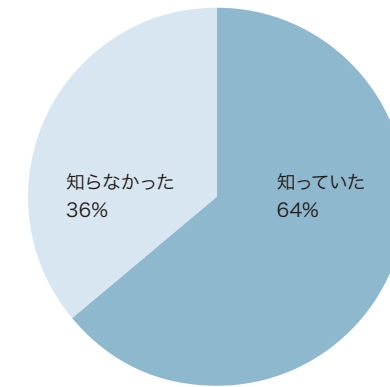


Q3 本イベントは何を通じて知りましたか。

Facebook や Twitter の投稿がきっかけで参加される方が半数で、SNS の広報が有効的でした。通りすがりが 10% 程度であることから、目的をもって来場される方が大半だと推測できます。昨年度に比べて前回のイベントがきっかけで参加される方が倍増し TERATOTERA のリピーターの数が増加したと考えられます。

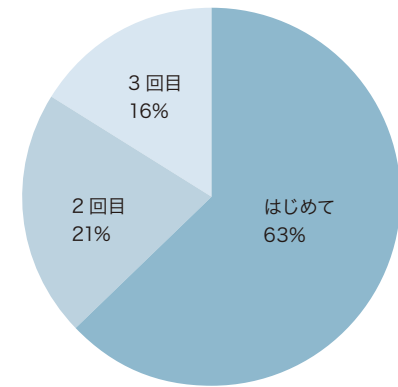


Q4 TERATOTERA をもともと知っていたか



Q5 TERATOTERA の参加回数

リピーターとしてきてくださっている方が昨年度よりも多かったです。一方、パフォーマンス・デイでは演劇やパフォーマンス好きで初めて TERATOTERA のイベントに来場したという方が多く、TERATOTERA のコンテンツの幅が広がったと感じました。



Q6 来場者の感想

- 😊 いろんな出店者やアーティストの方に会えてとても濃厚な 1 日でした。お金を使わなくても人と繋がれるし、素敵な体験もできる。自分の想像力がくすぐられるイベントでした。毎年開催してほしい。(Really Really Free Market)
- 😊 シンガポールの実情やコミュニティアートの具体例が聞けてよかった。海外からきたアーティストの考えや企画に触れられるのは貴重。(Really Really Free Market)
- 😊 場所と作品の関係性がとてもおもしろいと思いました。信愛書店のスペースがとても心地良いです。どんどんやってください。(西荻映像祭)
- 😞 (展示会場の) タイ食堂に入る勇気がなかった。(西荻映像祭)
- 😊 電車の音が BGM、歩行者の人も巻き込むインスタレーション。鮮やか！寒い中素晴らしいパフォーマンスをありがとうございました！無料で見れてすごく助かります。(パフォーマンス・デイ)

- 😊 子供と参加させていただきました。子供の創造性をくすぐる感じだったようです。ありがとうございます。在宅地域で現代アート、それも質の高いものをみる事ができて、いつも嬉しく思っています。今年のテーマにもとても共感しています。(TERATOTERA 祭り)
- 😊 (山城知佳子の作品は) 静止画に切り替わった後の音の掛け合いが本当に怖くて鳥肌が立った。戦争と沖縄の人たちの日常の風景が全て繋がって今があることを意識させられて心がえぐられた。素晴らしかったです。(TERATOTERA 祭り)
- 😞 事前の情報が少なかつたため見られなかつたイベントもあり残念。次はもっと色々全部回りたいです。(TERATOTERA 祭り・トーク)
- 😞 外国人アーティストの通訳がいなかつた。ボランティアや出演者で対応すべき。(TERATOTERA 祭り・トーク)

TERAKKO'S VOICE

TERAKKO の感想

■ 「普通の人」はどこにもいない / 小西佐和

TERAKKO 2年目です。今年度はあまり準備段階から関われなかったのですが、当日スタッフとして参加する中で鑑賞者の方や街の方と接したことが印象に残っています。

たとえば西荻映像祭では、作品を観ていた小学3年生くらいの男の子が、その会場のインスタレーションを作家が意図した通りに読み解いて体験してくれました。私が驚いていると、さらにその子のお父さんが「これ作った人、小学生男子みたいだなあ」と。あ、これはすごいなと思いました。子供なのに作品の仕掛けを理解し

たのがすごいではなくて。大人なのに子供に伝わるものを作るアーティストがいて、作品のメッセージを受け取って応答した人がいて、それを傍で見て何かを感じた人がいる。そのことがすごい。

たぶんどこかで「普通の人にアートを説明しなくちゃいけない」と意識していたけれど、そうじゃないんだと思いました。普通の人とアートを解する人がいるわけではない。たまたま街なかで起きている、日常とは違う出来事に参加すること。自分の「当たり前」を少し越えること。何かのきっかけに出会うことでスイッチが押されるような。きっとそのスイッチは誰にでもあって、それがアートとも思わずに触れ合えたらいいのかもしれない。「これはアート作品なんです」という自分の言葉がかえって壁を作っているように感じることもあります。

それから TERAKKO でいると、一方でアーティストもまた消費者であり親であり市井の人である様子を目の当たりにできて面白いです。アーティストもけっこう普通なんだな……。



■ TERATOTERA を本当に楽しむには… / 立山周一郎

TERATOTERA の全体感想を頼まれて、結構困った。

僕は2年目だが、TERATOTERA 全体のことは、正直よく分からないしあまり興味もない（多分、TERAKKO の誰もよく分かっていないと思うが……）。

去年（2016年）は、ビリヤード場で遅くまで作品と一緒に作ったり、作家の家で餃子を作ったり、宇宙人の衣装を作って観客に質問したり。17年は、三鷹の商店街をまわって、広告を募ったり、駅前に図書館を作って、ずっと炬燵に入っていたり。

敢えていうなら、そういう局所的な積み重ねが、自分にとっての TERATOTERA そのものだ。アートを理解するのに一定の法則が無いように、TERATOTERA にも普遍的なシステムは無い。「作家との出会い」という個別具体的な出来事で成り立っているアートプロジェクト。それが TERATOTERA なのだと思う。

そもそも芸術作品とは、「いわくいいがたい」ものだ。言葉にした途端に、変化してしまう。だから「鑑賞」するしかない。しかし、現代においては、多様な文脈におかれた作品を理解するには、単なる「鑑賞」では圧倒的に情報量が足りないことがある。それで、美術館によっては「キャプション」を書いて理解するための情報量を増やしたり、作家によっては「体験」作品を制作することで、頭での理解の範疇を越えようとする。

TERATOTERA では、そういった機能の一端として、TERAKKO が存在する。作者と鑑賞者の間において、制作を「協働」することで、作品や作家を誰よりも体験し感じる。鑑賞者にとっては、多少なりとも理解を促すツールとなる。それは、作家や鑑賞者、どちらか一方の言葉で作品を理解することを越えようとする試みにも思える。

だから、TERAKKO には TERATOTERA 全体のことは分からない。あくまで個別の作家と作品について、経験できれば十分なのだ。だから、TERATOTERA を本当に楽しむ為には、きっとあなたが TERAKKO になるしか方法は無い。ようこそ、TERATOTERA へ。



■ 街なかアートに耳を澄ませば / 吉野睦美

2016年の TERATOTERA 祭り。イベントの存在を何も知らず、普段通り三鷹駅を降りると、目に入ってきたのはおっきい顔のお面を被った人。脇には「似顔絵描きます」との看板が。一抹の関心が芽生え速度が緩まりつつも、私の足は止まることはありませんでした。

初めての TERATOTERA との遭遇をスルーしてまったそんな私が、その存在を改めて認識する機会となったのは、翌17年の「リアリー・リアリー・フリーマーケット」でした。SNSで見かけた「お金を使わないフリーマーケット」という文句に惹かれ、近所だとして今度は自ら足を運んだのでした。いわゆるフリマも十分楽しいけれど、そこにアートを掛け合わせることで、より広い枠組みの中でやり

取りが生まれ、多様な楽しみがありました。普段利用している沿線でこんな楽しいことをしているなんて、とこのイベントをきっかけに TERATOTERA に興味を持ち、仕掛ける側も覗いてみたいと、TERAKKO として参加するに至りました。

街のなかで展開されるアートプロジェクト。普段生活している場に突然現れた作

品に対して、耳を澄ませてみる、観てみる、話をしてみる。私自身はおっきい顔のお面を被った人を見たときに通り過ぎてしまったけれど、目の端で作品を捉えてちょっと関心を持った誰かが、ふと立ち止まるきっかけに、TERAKKO としての自分のちょっとした活動が繋がれば。新米 TERAKKO として、TERATOTERA を通じて生まれる新たな出会いや世界を自分自身が楽しみながら、淡くゆるく期待を持っています。



INTRODUCTION TO THE ART PROJECT

アートプロジェクトの0123 (オイッチニーサン)

多彩なゲストの経験から思考を深める

2017年6月より約8ヵ月、「今、本当に必要なアートプロジェクトはなにか?」をテーマに、アートプロジェクトの基礎を学ぶ講座を開講しました。コーディネーターの小川希による、コンセプチュアルアートや映像表現、インスタレーションの近年の代表作を学ぶレクチャーのほか、9組のゲスト講師による活動紹介でアートプロジェクトへの思考を深めました。

記録を見ているだけで精神を削られるようなアーティストの作品紹介、そして発表の場を支えるプロデューサー、キュレーター、コーディネーターの地道で力強い活動。アートプロジェクトを巡る様々な立ち場と関わり方を、各方面で活躍中のゲストから直接学ぶことができる貴重な機会となりました。

(高村瑞世)

開催日時.....2017年6月22日(木)～2018年2月22日(木)
19:30～21:30 原則隔週木曜日 全17回

会場.....アーツカウンシル東京 ROOM302

コーディネーター.....小川希

ゲスト.....いちむらみさこ、小泉明郎、山本篤、ペピン結構設計、
福住廉、港千尋、窪田研二、
Minatomachi Art Table, Nagoya(青田真也、野田智子、吉田有里)、
相馬千秋

Date.....2017.6.22(Thu)・2018.2.22(Thu)

Venue.....Arts Council Tokyo ROOM302

Guests.....Misako Ichimura, Meirou Koizumi, Atsushi Yamamoto,
Pepin Structural Design, Ren Fukuzumi, Chihiro Minato, Kenji Kubota,
Minatomachi Art Table, Nagoya(Shinya Aota, Tomoko Noda, Yuri Yoshida),
Chiaki Souma

Coordinator.....Nozomu Ogawa



講座内容

第1回 | 6月22日
イントロダクション

第2回 | 7月6日
コンセプチュアルアート

マルセル・デュシャンを祖とするコンセプチュアルアートの歴史は、現代美術の歴史そのものといっても過言ではありません。まずはその基本をおさえることから始めました。

第3回 | 7月20日
アーティストの話を聞く

●ゲスト講師：いちむらみさこ(アーティスト)
ブルーシート村や段ボールハウスに寝泊まりし、生活の中で対面した問題やフェミニズムにフォーカスを当てた作品/場を創り出す、現役ホームレスアーティストのいちむらみさこをゲストに迎えました。

第4回 | 8月3日
映像表現1

現代の美術シーンにおいて、映像表現の多様さを見逃すことはできません。映像表現がこれまで何を問題とし、どんな実験を重ねてきたのかを省察しました。

第5回 | 8月24日
映像表現2

●ゲスト講師：小泉明郎(アーティスト)
独自の語り様式を用いて、演劇的とも評される映像作家の小泉明郎をゲストに招き、内奥の感情や記憶をテーマとした映像作品の紹介や、映像というメディアを通してどのように人間の心理を探索するかお話を伺いました。

第6回 | 9月7日
インスタレーション1

●ゲスト講師：山本篤(アーティスト)
映像を中心にパフォーマンスやインスタレーションを展開する山本篤を招いて、過去作品を見つつ、インスタレーションの面白さや可能性についてお話を伺いました。

第7回 | 9月21日
インスタレーション2

現代のアートプロジェクトで多く登場するインスタレーション。歴史的にどのような試みが行われたのか、実際に作品を見ながら学びました。

第8回 | 10月5日
演劇

●ゲスト講師：ペピン結構設計(演劇集団)
横浜を拠点に色々な地域に向き作品をつくる演劇集団のペピン結構設計をお招きして、家/まち/自然の中など、さまざまな場所で「そこを劇場にする」プロジェクトのお話を伺いました。

第9回 | 10月19日
作品評論の作法、展覧会で作品の評論を行う

●ゲスト講師：福住廉(美術評論家)
美術批評家の福住廉をゲストに迎え、展覧会、作品についての基本的な文章の書き方や、読む人への伝え方をレクチャーしてもらいました。

第10回 | 11月2日
作品評論の作法、展覧会で作品の評論を行う

●ゲスト講師：福住廉(美術評論家)
展覧会の感想文を事前に提出し、講師の添削を受けます。添削を受けた文章を例に、良い点や改善点を話し合いました。

第11回 | 11月16日
作品評論の作法、展覧会で作品の評論を行う

●ゲスト講師：福住廉(美術評論家)
講師に最終確認してもらった文章を受け取り、最終版を受講生同士で読み合いました。お互いの文章を俯瞰して見ることを目指しました。

第12回 | 12月12日
アーティストックディレクターの活動を知る

●ゲスト講師：港千尋(NPO法人Art Bridge Institute代表理事)
「群衆」「移動」などをテーマに写真を撮りながら多彩な評論を行うほか、各地で取り組まれているアートプロジェクトや、他分野とアートの連携活動を取り上げた機関誌『ARTBRIDGE』の発行のディレクションを行う港千尋を招いてお話を伺いました。

第13回 | 12月14日
キュレーターの活動を知る

●ゲスト講師：窪田研二(インディペンデント・キュレーター)
数々の展覧会や芸術祭にキュレーターとして関わり、多様なアプローチからアートや表現を社会に結びつける活動を行っている窪田を招いてお話を伺いました。

第14回 | 1月11日
コーディネーターの活動を知る

●ゲスト講師：Minatomachi Art Table, Nagoya
青田真也、野田智子、吉田有里
名古屋の港まちをフィールドにした新しいアートプログラム「Minatomachi Art Table, Nagoya」(青田真也、野田智子、吉田有里)を実施している3名を招いて、現場のお話を伺いました。

第15回 | 1月26日
アートディレクターの活動を知る

●ゲスト講師：相馬千秋(芸術公社代表理事)
国内外で多数の演劇関連のプロジェクトのプロデューサーやキュレーションを行うほか、アジア各地で審査員、理事、講師等を多数務める相馬千秋を招いて、お話を伺いました。

第16回 | 2月8日
受講生によるアートプロジェクトの企画発表

第17回 | 2月22日
受講生によるアートプロジェクトの企画発表

EPILOGUE

おわりに

今年度も、本当に TERAKKO あっての TERATOTERA だったなあと実感している。TERATOTERA の特徴の一つとして、他の芸術祭よりもはるかにボランティアスタッフとアーティストの距離が近く、関わる密度が濃いということがあげられると思います。

夏に開催した Really Really Free Market では、アーティストと同じ立場でマーケットの出展者として参加、西荻映像祭では夜中まで設営を手伝う場面もありました。来場者参加型の TERATOTERA 祭りでは、作品の一部として演者のような振る舞いもしていたのです。

今は TERATOTERA の事務局長を務めるわたしも、最初は会社勤めをしながら TERAKKO としてこの活動に関わっていました。参加し始めてから数カ月後に開催された TERATOTERA 祭りの会期中は、終業時刻に会社を飛び出し、毎日吉祥寺に向かう。街中での作品展示や音楽ライブの運営を手伝うと、その後の打ち上げに夜中まで参加し、朝になればまた会社に出勤するという、酒とアートの日々でした。あの頃からわたしを一貫して魅了するのは、作品が街に立ち上がっていく過程を目撃する高揚感と、アーティストと政治について、作品について、そして内容

も覚えていないほどくだらない話をする時間の楽しさ。

一方で、一筋縄ではいかない作家たちのプランを現実にしていくには気力も体力も必要です。TERATOTERA 祭り会期中は、1 日目、2 日目、3 日目と、日に日に TERAKKO の顔に疲労の色が塗り重ねられていくのが見て取れました。だけど打ち上げで作家と並ぶその顔は、同様の充実感を帯びていたのです。

今年度は本当に多くの方々にお力を借りて各事業を実現することができました。武蔵野プレイスと協働で実施した Really Really Free Market。営業中の店舗で開催した西荻映像祭。そして三鷹駅周辺の各施設に様々な調整をいただいて実現できた TERATOTERA 祭り。全ての企画にご協力いただいた皆様に、心から感謝いたします。そして今後も、一人でも多くの方がこの活動に関わり、知らず識らずのうちに TERATOTERA に参加したアーティスト、そしてその作品の虜となっていくことを、望んで止みません。本当にありがとうございました。

TERATOTERA 事務局長
高村瑞世

It is my sincere belief that TERATOTERA owes everything this year to TERAKKO our volunteer staff.

In comparison to other art festivals, one of the special features of TERATOTERA is that volunteers and artists work very closely together.

During our summer event Really Really "Free" Market, both volunteers and artists participated by creating their own stalls, whilst during Nishiogikubo Film Festival there were times when volunteers helped with setting up right until midnight. During our participatory TERATOTERA Festival, they even became performers as a part of the artwork.

I myself, now the chief manager of TERATOTERA, started out as a part-time TERAKKO whilst working as a regular company employee. After first joining, the TERATOTERA Festival was held and I remember rushing out after work everyday to go to Kichijoji. After aiding in the operation of art exhibitions and live music performances throughout the city I would go to after-parties until midnight before commuting to my regular workplace again the following morning. Those were really full days of art and partying. Since that time, I have consistently been mesmerized by the joy and sense of uplift I get from witnessing the entire process of installing artworks throughout the city. I also have fond memories of all the ridiculous conversations I've had about artists, politics, artworks, and some topics so crazy that I can

hardly recall them now.

Realizing artworks proposed by those artists whose artwork plans do not follow any set method, requires great willpower and strength. During the TERATOTERA Festival, from day one, day two, day three and so on, day after day, I could see fatigue grow on all of the TERAKKO's faces. However, at the closing party standing alongside with the artists, their faces would show the same sense of fulfillment. This year, it is truly thanks to the borrowed strength of so many that we were able to realize all of our endeavors. Thanks to Musashino Place who collaborated with us to produce Really Really "Free" Market, to the venues that hosted Nishiogikubo Film Festival, to all the locales around Mitaka station that made adjustments and worked with us to produce TERATOTERA Festival, and to all those who worked in cooperation with us in all of our activities, I would like to express my deepest gratitude from the bottom of my heart. I can't hope enough that in the future many more people will continue to connect with our activities and that they will unwittingly become captive admirers of the participating artists and the artworks exhibited at TERATOTERA. Thank you all so very much.

Mizuyo Takamura
TERATOTERA Chief Manager

〔ディレクター〕 小川希

〔事務局長〕 高村瑞世

〔事務局スタッフ〕 池田佳穂

〔地域連携チーム〕

※広報の配布リスト・スケジュール管理、地域連携方法の考察、
周辺地域施設との協働イベントの企画運営、チラシ街置きリストの管理
梅澤光由、岩尾庄一郎、橋口聡美、清田洋美、大瀬戸花苗、
都賀田一馬、佐藤卓也、落合智子、篠原悠

〔記録チーム〕

※各イベントのビデオ・写真撮影、トークイベントの文字起こし、記録冊子の掲載情報管理
西岡一正（監修）、石水典子、福岡彩乃、千葉佐奈子、増子千博、
佐藤卓也、小西佐和

〔RRFM チーム〕

※アーティストとの調整、当日運営補助・管理
前川順子、いでうらみかこ、橋口聡美、海藤早希子、遠山尚江、
三浦留美、小西佐和、梅澤光由、鶴田真菜、浪江航一

〔西荻映像祭チーム〕

※作家との作品プラン調整、作品制作補助、当日運営補助・管理
立山周一郎、榎戸杏子、浪江航一、小山里実、三浦留美、
梅澤光由、増子千博、旭桃子、岸田瞳、山崎真理、柳本典子、
崎田雅俊、山上祐介、林真実

〔パフォーマンス・デイ チーム〕

※出演者との調整、当日運営補助・管理
浪江航一、遠山尚江、佐藤卓也、荒田靖仁、落合智子、前川遙子

〔TERATOTERA 祭り〕

上記全員、吉野睦美、小川真由子で運営

〔TERATOTERA 祭り当日ボランティアスタッフ〕

阿部満世、谷津晴香、金江理沙、藏田章子、関恵理子、
鈴江真由子、栗原麻緒、金井道正

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを
通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とア
ーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開してい
る事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、
アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可
能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPO を育
成します。

<https://www.artscouncil-tokyo.jp/>

TERATOTERA DOCUMENT 2017

監修	小川希
編集	西岡一正
デザイン	トール至美
写真	Ujin Matsuo Takafumi Sakanaka studio takano
翻訳	浪江航一 吉崎ゆきえ 本村桜アリス
主催	東京都 アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団） 一般社団法人 Ongoing 公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団 (Really Really Free Market)
後援	三鷹市 武蔵野市
協力	株式会社リライト 株式会社 JR 中央ラインモール HYM（ハモニカ横丁ミタカ） 株式会社 まちづくり三鷹 UR 都市機構（独立行政法人都市再生機構） 武蔵野美術大学芸術文化学科
助成	公益財団法人 花王 芸術・科学財団 杉並区文化芸術活動助成事業
発行	平成 30 年 3 月 22 日 アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団） 〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス 8 階 Tel：03-6256-8435/Fax：03-6256-8829
問合せ	一般社団法人 Ongoing 〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町 1-8-7 Tel/Fax：0422-26-8454 Email：info@teratotera.jp http://teratotera.jp

ARTS
COUNCIL
TOKYO



TERATOTERA

D O
C U
M E
N T

20
17

